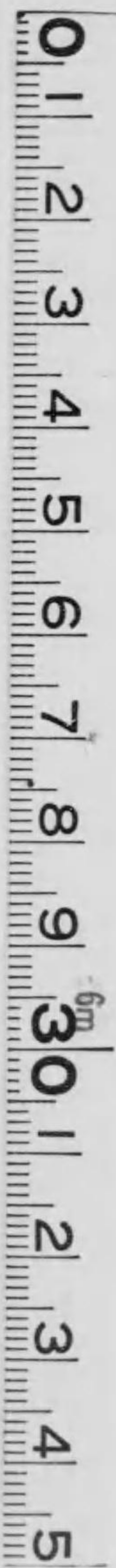


253

186



始

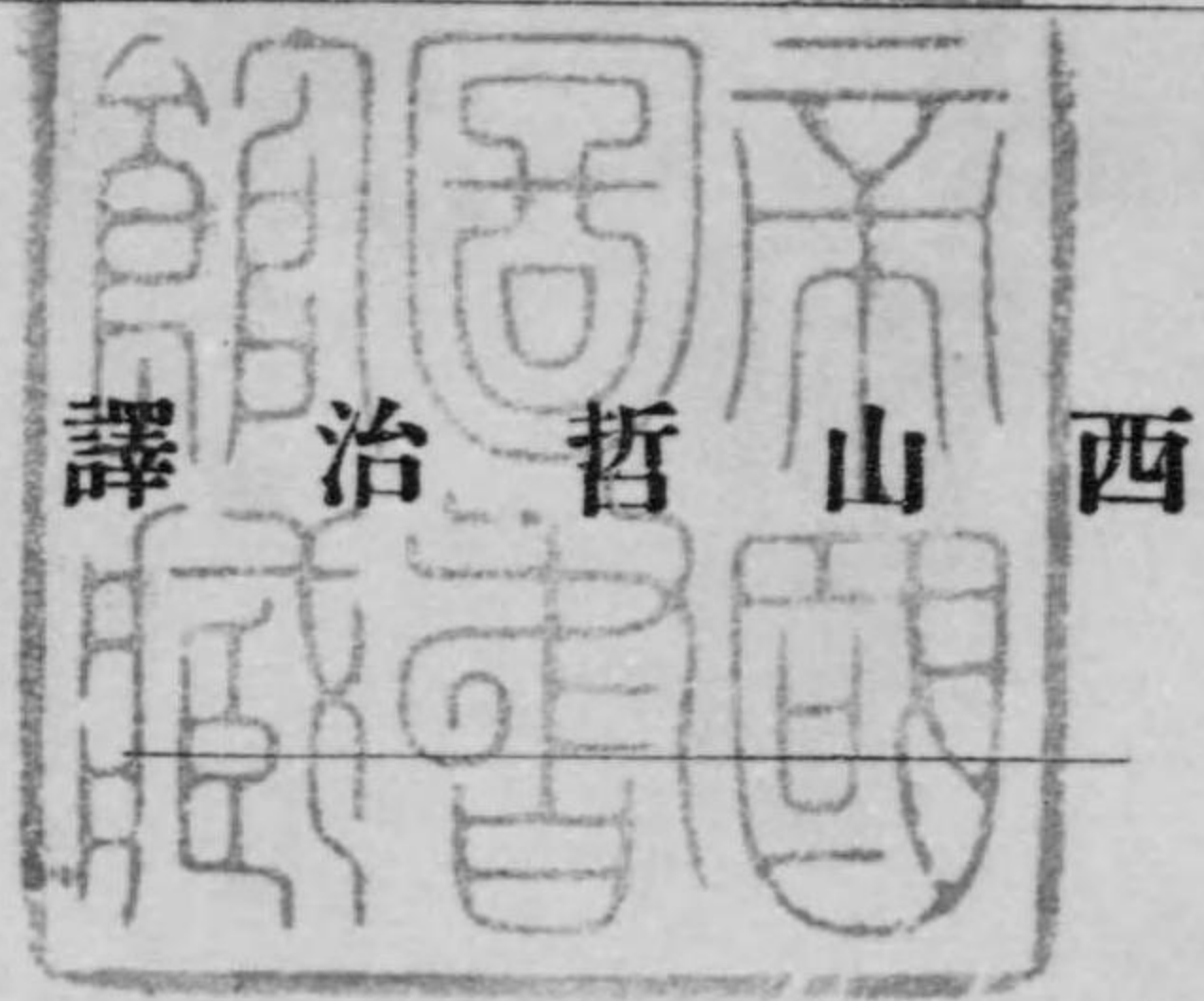


90



ト ス ル イ 伯

253-186



イ ト ス ル ト

と

論 造 改 育 教

行 發 社 佑 天

大 正

9. 4. 22

内 交

序

トルストイ伯は徹底的に自覺した人であつた。眞の自由を叫び、その主義の上に理想の社會を豫想して、普ねく人類を此に導かうとしたのである。伯の文藝的作品の多くは直ちに移して學校に用ひらるべき活きたる修身書であつた。

世には文豪としてのトルストイ伯を知つて、未だ教育家としてのトルストイを知る人は甚だ少ないやうである。

然るにトルストイ伯は四十年來教育に多大の興味を有し、自ら一私立小學校をその郷里なるヤスナイア、ボリアナに設立し、農家の子弟を教育し、自らその校長を以て任じ、教育の實際的經驗をも積んだのである。それより得たる自己の教育的經驗は記して一教育雜誌に掲げ、以て廣く全國の學校をしてその模範に倣はしめやうとしたのであつた。

本書は私がアメリカに居た頃、クロスバイの原著『校長としてのトルストイ。』を譯したのである。私はトルストイ伯の如く自分の信じたところを自由に行ひ得る私立學校を建て眞剣にやつて見たいとその時一層自分の覺悟を深くしたのであつた。實に本書は私の教育事業を呼起さしめた動機の母であつた。私はその時文語體に譯したのであるが、此の頃取出して口語體に書き直して之を公表することにした。我が國の教育者によい一種の刺戟を與ふことゝ信じたからである。

附録の教育改造論はトルストイの教育思想に共鳴して私が述べた一編で、本書の補遺としたのである。

大正九年四月

東京巢鴨町

私立帝國小學校に於て

譯者 西山哲治

凡例

一、本書中に表はれた固有名詞中左まで必要のない人名は成るべく漢字に譯して原音に近いところにして置いたのである。

例へば

Michai ovitch Petes. を 三貝路平太、

Taraska. を 太良助、

Kiska. を 喜助、

Senka. を 仙嘉、

Howard. を 法藏、

Fedka. を 平藏、

Savine. を 清兵衛、

凡例

凡例

Pelka. を 兵十勝、

S.shi. を 笹子、(トルストイ伯令嬢)

Krouschka. を 喜郎助、

一、本書中の單稱代名詞は第十、十二、及第十三章ではトルストイ伯自らのことである。又、その他の各章中に表はれたものも多くは伯自らのことである。更に三、稱の「彼」といふのも主としてトルストイを代名したものであつた。
一、原著には序文はなかつたことを斷つて置く。

西山 哲 治

目次

第一章 小學校長としてのトルストイ……………一

第二章 學校での争闘……………二七

第三章 制 裁……………一四

第四章 お伽噺……………二〇

第五章 自 由……………四

第六章 教授法……………三〇

第七章 諳誦及試験……………四五

第八章 歴 史……………五四

第九章 他の學科……………六六

第十章 トルストイ最近の見解……………七二

第十一章 米國に於ける實驗……………一六三

第十二章 家庭に於けるトルストイ……………一〇七

第十三章 刑罰學……………一七八

附錄 教育改造論

一、教育改造問題……………一三九

二、デモクラシーは教育改造の聲也……………一四〇

三、社會をして眞に教育を尊重せしめよ……………一四五

四、成金道德を涵養せよ……………一四九

五、國民性の改造と教育……………一五三

六、教育監督者の改造……………一五八

七、父母の頭の改造……………一五九

八、子の心親知らず……………一六一

九、子供の三大權利を認めよ……………一六六

一〇、小兒労働を嚴禁せよ……………一七三

一一、職業教育を加味せよ……………一七八

一二、義務教育年限の延長……………二〇八

一三、例外兒童の教育……………二〇九

一四、婦人刑事を設けよ……………二一一

一五、教育者の改造と待遇……………二二二

一六、事務省略と能率増進……………二三三

一七、私立學校の優遇……………二三四

一八、教育者の氣分と師弟關係の改造……………二四六

一九、教育方法の改造……………二四七

(一)能力制學級編制と半年進級制……………二四八

(二)教授訓練の改造……………二六六

(三)授業時間の改造……………二六三

(四)小學校教科目の整理……………二七一

目次終

教育家トルストイ伯
としての

ドクトル、オブ、ペダゴギー 西山哲治譯

第一章 小學校長としてのトルストイ

文學的描寫の裡に自己の教育的意見を吐露して見やうとはトルストイ伯のいふところ、彼は過去四十年來教育に多大の興味をもつてゐた。その材料は優に彼をして一大教育小説に筆を染めしめ以て後世に傳ふるに足るものであつたのは彼に於てはじめて望み得べき事であつた。彼はその郷里で千八百六十二年初めて彼の政治及社會に關する意見を公にして、偉大なる功績を示して以來小學校長の椅子を占むること多年に及んだのであつた。

第一章 小學校長としてのトルストイ伯

奴隸は開放せられ、地主も覺醒した。その時トルストイは新しく得た自由を實行するに最も適當な人とする爲に彼の農家の子弟を教育せうと思ひ、三四の教師を従へて學校を建設した。その時約四十名の生徒を得た。中數名の女生徒も入學してゐた。

單に一學校の經營を以て満足しなかつた。トルストイは一教育雜誌の主筆となつて、自分の經營する學校の性質及教育上の方針などに就いてその經驗した結果を發表して、全國の學校を彼に倣はさうと力めた。勿論此の時代に成つた論文は當時の教育的偶感を發表したに過ぎなかつたのである。従つて彼の文學と共に傳へられる様な名作妙編といふやうなものではなかつたのである。然れどもトルストイは彼自身教育上の卓見と才能をもつてゐた。彼はすべてに於て純然たる天才の本分を發揮してゐた。その教育雜誌に寄せたものは全教育界の注意を喚起し、同雜誌の刊行せられてから殆ど三十年の後此等の論文を一括して四卷となしフランス語を以て出版せられたのである。而して本書の材料は主として此の四卷から仰いだものである。

L' Ecole de yasnaja Polana.

ヤスナイア、ボリアナの學校。

Le Progrès et l'Instruction Publique en Russie.

露西亞の社會的教育及其の發達。

La Liberté dans l'Ecole.

學校に於ける自由。

Pour les Enfants.

少年に與ふ。

二階建石造の家屋を學校に選定し、小さい鐘は廊下に懸り、毎朝八時に鳴り渡る、三十分の後には子供等が集まつて來た。遅刻者に對しては何等處分するところはなかつたけれども課業の始まる時刻に缺席者を見ることは甚だ少なかつた。子供の持つて來るべきものは何物もなかつた。書物、手帳は勿論、石盤をも携たづさえ來させなかつた。

又彼等に復習しなければならぬ様な教課を教へなかつた。従つて彼等に自分が如何なることを學習したかを記憶しなければならぬ義務もなく、拘束することもなかつた。子供は決して彼の試験又は誦讀などの爲に苦しめられることは絶對になかつたのである。『子供は唯その儘で來なさい、感應し易いその天性を飾ることなく、その儘で來なさい。學校は汝等を導いて幸福にすることは今日も昨日と變らない。』教師も生徒も此の精神とならなければ授業を始めないのである。子供等が自ら進んで學ぼうとする決心の色あるまでは放任して決して教授を強ふるやうなことはなかつた。

今トルストイ自身の言葉を以ていふならば、『教師の教室に入るは恰も教壇上で生徒を指揮する雜兵の様なものである。一人のさゝやきは數人の聲を産む。叫ぶものもあれば、聲高に語るものもある、たゞいて御覽』といふものもあれば、此方には「厭だよ、頭の毛を引ばつては。」と、呷くものもある。此の騒がしい一群の裡から教師の名指す一聲、

「三貝路平太」さん静かになさい。と命つて下さい。

「お早う三貝路平太」と多數の叫ぶ騒ぎは依然として喧しい。

教師は書籍棚に進んで、書物を取り出し、順次彼等に分配すると彼等の騒ぎは一時其の頂點に達したけれども教師は漸次にその騒がしい度を減じさせる。彼等は更に轉じて今は復書物に對して残らず騒ぎ初める。苦し一二の子供が起つて互に争ひ初める。すると他の子供も止み難く中腰の姿となる。又、或ものは書物片手に叫びはじめやう、「おい、もう止せよ。どうして左ういつまでも騒いでるんだ。何も聞けないぢやないか。」

漸く彼等すべてが静坐するのを待つて、椅子に倚り、洋机に近づき、窓の闌に、或は床の上に、又或者は何處から運んで來たものか安樂椅子に掛けるものもある。斯うして今は用意全く成り、何處にも私話し、笑ひ或は捻り合ふものもなくなつた。授業に對する時間は全く不規則である。若し生徒の興味に適應するならば一

時間を以て授け終る教課でも時には二三時間に延長することがある。又時には授業が將に終らうとすると、「もう少し先生、まだですよ。」と子供の叫ぶことは屢々あつた。子供は學校に來なければならぬ義務もなく、又引續き在學させやうと拘束する様なこともない。従つて彼等から注意を拂ふ何等の要求をなさなかつた。

思ふに此の外面的の不規則は有益であつて且必要である。けれども教師としては冷淡な様に又は倦怠してゐるがやうに見えないでもない……。

第一の場合に於て此の不規則、或は寧ろ自由に従ふ規律ともいふべきものは單に吾人を杞憂させるだけに過ぎない。何となれば吾人は純良な一の組織の下に習慣づけられ、教育は自治獨立を目的とするからである。

第二に此の場合に於ては一般に不注意であつて、豫測し難い人性の上に漫然と建設せうとする力であるともいふことが出来る。それは恰も不規則が利益であつて

且刻々その發達を示してをるかに似てゐる。即ちそれを抑制することがなくては到底制止し得ないものゝ様である。けれども此の不規則なものが譬へば燃え立つ火のその様にそれ自身に依つて自からを制し又、更に純良な規則を産み、而も以前よりは尙強固となつて前の不規則は遂にはその形を代へるものがあるといふことを知るに難くはないであらう。』

要するにトルストイの主張するところは子供を合理的に且理性的實在として導かなければならないと説いたに外ならないのである。

子供は彼等自身が能くその必要な要求や規則を索め出すものであるから必ずしも彼等に憤怒の念を起さしめるやうな徒らな干渉を要しない。唯彼等をして先づ獨立的に子供等自身を以て經驗させなければならぬといふのである。

第二章 學校での争闘

トルストイは又子供の争闘に對して干渉しなければならぬものだとは思つて居なかつた。で彼の言ふには

『教師は彼等の争闘を分けやうとして彼等の中間に立つ。』

「二人の敵は互に怒りの心を以て睨み合つてゐる。彼等が常に恐怖してゐる教師の面前であつてさへ制止することが出来ず以前よりも一層劇烈に掴み合はうとした。一日中に幾回となく喜郎加キロウカが齒をかみしめて太良助タラノスケを攻撃し頭髪、咽喉を掴んで打倒さうとした。それは恰も彼の容姿を傷つけ、又は彼を殺してしまはうとするものゝ様に見えた。けれども争闘が止んで未だ一分にもならないのに太良助は常に喜良切を顧みて微笑してゐた。又は互に洋机に着きなどして五分も経たないうちに二人は再び善友となり椅子をならべて睦しく話しながら我を忘れて和氣を放つてゐた。」

『此の頃のこと二人の子供が學校の裏の片隅に端なくも争闘をはじめた。——そ

の一人は九歳前後の物覺のよい數學家で第二年度の生徒である。他の一人は黒い眼の頭髪の頂上だけ刈り上げて賢いけれどお饒舌しんべをよくする。名を喜助キスケと呼ぶのであつた。喜助は數學家の長い頭髪を掴み、壁の方に頭を押しつけた。間もなく喜助は彼を掴み伏せ一倒しにしようとした。喜助の黒い眼は勝利と得意とで燦として煌いてゐる。此の間に數學家は苦しみながら辛くも彼の涙の雫を押止め得たやうに見えた。

『よし、何だい？、何だつて？。』と彼は呼ぶ。然れども彼は大いに苦しめられてゐるのである。苦しみながら彼は唯勇者の装をするに力めてゐるのである。暫くはかう行惱ざんんでは如何したらよいかと困り果てゐるかの様な姿にも見え

た。『掴合つてゐる、組合つてゐる!!!』と、子供等は呼びながらその片隅に群り直ちに彼等二人を取り巻いてしまつた。小さい子供等はたゞ笑ひながら眺めてゐた。けれ

ども大きな子供等は對手を分け様とはしないで真面目な態度で以て二人の組合ふ様を觀察してゐた。喜助は無言で取り巻いた子供等を打ち守つてゐる。彼は自分のしてゐることは正しいことではない、よいことではないといふことに氣附いたのである。彼は微笑し始めた。そして遂に靜かに數學家の頭髮を放してやつた。數學家は此に初めて自由の身となると直ちに喜助を壁の方へ押しつけ、十分満足した様な姿でその場を引き上げ様とした。周圍を取巻いた小さい子供等はワット叫び始めて彼の後部を突き、彼を怪我しない程度に上衣コートの上から力を限つて打つた。數學家も今は耐えかねたのか後を振り返へり打ち返した。その時恰も教室へ導かるべき生徒には好まれない警鐘が鳴り渡つた。

「あら、彼奴あいつは小さな子供を打つてるよ！」と傍觀者の一人が叫んで、「喜助、遁げろ、遁げろ!!。」

事件は後に何等の影響も残すことなく全く茲に終りを告げて終つた。此に於て二

人の少年は争鬪の不快であり、又、寧ろ厭ふべきものであるといふことを知つたと同時に彼等の心に宿つてゐた曖昧なる友誼的觀念も恐らくは消え失せて終つたであらう。

此場合の正義の觀念は群集した子供等によつて刺激せられたのである。けれども如何に斯んな事件を度々繰返したからとて、ある未見の規律の徳に因らなければ雙方之を悟ることはあるまい。如何に專斷、不正を事とするものも遂には改悛の途につくものである。「二人とも悪い、よく考へて御覽ん。」と、教師がいふ。彼は不當である。罪するならば唯彼等の一人である。争鬪の正しいことではないといふことを恥じたとしても尙得意の色があつたり、又は彼が純惡の念を以て凝視してゐる間は再び制裁の罰を受けなければもとの無邪氣にかへらないのである。「お前のすることは彼れも此れも罪せられなければならぬ。そしてお前は今その當然な制裁を受けなければならぬ。」と教師が言ひ渡した。

徒に彼の敵を悪まうとする子供を罰し彼の専横な力を加へ様とする感情を一變させて正當な方面に向はしめやうと制裁した。

「彼を赦しておやり、神も亦それを希はれるでせう。而して今の彼よりも更に悔改めた善い彼となさい。」と教師は嚴かな調子を以て言つた。

「お前は彼れに左う言ひなさい。もつと彼に良くなる様にと唯強くなるばかりでなく、もつと善良な子になるやうに。」併し彼は教師の言ふところの意味を理解することが出来なかつた。

「お前等二人は共に悪い、お互に謝罪して共に接吻すればよいだらう、どうだね。」相互に誠實を以てする接吻でなければ極悪である。少しでも悪感情がいつれかにあるとすれば再び近いうちに争闘を起すことがある。

彼等をして互に關はる様なことがあつてはならぬ。さうすれば汝は子に對して父母が十分に寄せるその如き愛である。

彼を打ち何人が頭髪を引くやうなことがあつても彼は常に正しくあるでせう。彼等には毫も關するところもなく、何事にも秩序を守り、自から平穩に、單純に最も自然的とならせることが必要である。

トルストイは恰もホームー英雄の争闘に耽けつた様に喜助と數學家との争闘をして幾多の經驗を味はしめるだけの餘地を與へた。此の物語は實に單純である。けれども其の公表せられると逸早くも佛蘭西に紹介せられ、次で佛語を通じて英譯せられたのである。此等凡ての事實は彼が不朽の文學中に異彩を放つたものである。

斯の様に子供等の争闘に際してはトルストイの經驗したと同じく、其の教師等もその間に子供に考へる猶豫の餘地を與へることの必要を感じたのである。而してその結果は常に良好であつて、神の心に反く徒らなる干渉よりも、以上のやうな衝突には常に自然の終止を待つ方が遙に利益のある結果を導くものであるといふことを、又制裁としての苦痛を與へ、或は叱責してのみ居たならば争闘者をして以前よりも更に甚だ

しくすることは屢々であつたといふことを知ることがあつたのである。

訓戒に對するトルストイの見解は寧ろ自然的であつたと言はなければならぬ。

第二章 制裁

制裁すると同時に非難することに就いてトルストイは彼をして深く感銘せしめ、又彼が初め一二度犯した罪は寛大にするのを以て制裁の方針としてゐた。けれどもその結果餘り寛大に過ぎたこの説の誤謬であつたことを知るに到つたのである。

彼は一例を示して言ふに、

蓄電瓶がその實驗室から消失した。鉛筆や書物が行衛知れずとなり始めた。學校の善き子供等はその犯罪に就いて尋問せられるとき赤面した。而して又尋問に對して恰も吃り聲のやうに見えた。けれどもそれは單に彼等を嫌疑さるゝを恐れての情に出たのに外ならなかつたのである。罪人として近い田舎から來る二人の子供が小さい箱の

中に彼等の盜品を秘してゐたことが遂に發見せられた。そしてこの事實は發表せられた。即ち生徒をして嫌疑者の處置に就いて講せしめたところ、學校に取つては大なる利益を得たのである。

それは子供に對する制裁の種類に就いての問題を子供をして研究させることに決定したのである。或者は鞭撻を主張し、又、或者は彼等自身の悔悟せる程度に於て許すべしと説き。他の者は二人の犯罪者の上に「竊盜」との肩書を形容して之を揭示場に發表せよと述べた。然して此の説は一般によつて採用せられた。又可憐な一少女は彼等の上衣コートの表面に憎むべき「盜」といふ文字を縫ひ顯したがよいだらう、と唱へた。その他の子供等はたゞ氣味悪く微笑を放つてゐた。二人の犯罪者に就いて嘲笑を傳へ而して次の休日まで揭示せられるとしたならば、此の田舎村は限なく此の事件で評判せられる様になるだらうと想像せられたのである。

二人の子供は悲哀の聲をあげて泣き限つた。而してその一人は同輩が彼を嘲笑して

ある態を見ていちらしく、且、慘酷な瞥見を與へた。彼が自家へ歸らうとする時頭を垂れて、眼は下の方の土を見詰め、犯罪の歩調を辿ることが、極めて徐々たるやうに見えた。又他の子供等は彼の二人の後に群りながら彼を遇するに至つて殘酷、此に惡魔の様な極惡人があると廣告せんばかりに彼を惱してゐるのをトルストイは見たのであつた。

その後トルストイはこの子供が以前よりも勉強しないやうになつたことを認めることが出来たのであつた。又、他の子供等と遊戯をするをためらふ風があるに到つたことも認められた。このことのおつて未だ幾日もならないのに彼は再び教師の銅貨を盜取つた。こゝに於て再び彼の名を掲示場に大書した。そして厭はしい以前の制裁が再び演ぜられたのである。

『余は彼に説諭するところがあつた。』といふ、トルストイの語は次の様である。

「余は校長の職責として彼を諭した。大きな子供はその説諭を聴かうとして停ち、

又余の繰返して説かうとしたことは彼が父の門番を職業とした人から已に説かれたことであつた。

「彼は一たび盜み今、又、「盜む」と。格言のやうな口調で「彼は盜む習慣ができたのかも知れない。汝は遂に罪の鎖を打切ることができないのか？」。

これは私を最も惱ました。私は少年盜賊に苦しめられたのである。今その罪人の顔を見るに、色は蒼白く、憂鬱になり以前よりも親むことが淺いやうに見え、さながら轉た獄舎の中の罪人を偲させるのであつた。然れども私はその理由を詳にしなかつた。彼の着物は常に濕ひをおびてゐた彼が涙多くなつたことを示してゐたのである。余は忽ちすべての事が不正なることを思ひ煩ふて、汝は如何にせんと希ふやと言葉急に尋ねた。余は一度は感じた。余は智力によらないで寧ろ余が全き實在として此の哀れな子供を罪するのは酷であると感じた、遂に余と門番の子との間に吾が希望してゐたところの訓戒を達することが出来なかつたのであ

る。余は其處に吾等が未だ見知することの出来ない精神の一大祕密あることを信じ、その祕密の力こそは人生をして意のままに轉變せしむるものであつて、非難責罰の力以上であり、又制裁の力の及ばないところである。

事の何ぞ痴愚に類する!! 子供は又も書物を竊取した。永く人の心に絶へない紛亂を起し、こゝろは虚偽を以て充された、彼が何故に彼の箱の中に祕すかを知らない。全く常事を意味しない盗人といふ語を彼の上に特筆して揭示した。「善い事は如何にすればよいか?」と彼が羞惡の念に訴へて制裁してやらうと思ひながらその答を促した。

羞惡の念に訴へて果して彼を制裁し得たか、その結果は如何。彼の意志を打破して更らに善い方に堅くなるまでその制裁はよき結果をあらはしたか如何。恐らくは之に反してそれは悪しきに鼓舞せられて、彼が顔面に表出するやうに慚愧したものではなかつたであらう。然り彼には自ら恥づる心がなかつたと斷言するに

躊躇しないのである。けれども彼の心を決して眠らしめない或力があつた。又、再び爲さしめないといふ或ものが確に彼の上に認められた。

バルマスン、ケインの世は凡ての事は皆實踐でないものはない。又、合理的である。否合理的の世といはんよりは實踐の世界である。——其處に於て人は皆その義務を果して喜び、彼自から我を制裁して自適尊大の風がある。けれども吾等が子供の世界は單純、質朴であつて虚言うそひ始める時代から懲罰の適合に於ける此の犯罪的主張に極めて自由に保持せられなければならない。此れは所謂復仇の觀念であつて、其れは臆て吾人の呼ぶ制裁なるものである。

トルストイが彼から得て導いた此の結論は他の教師の經驗に資するによい教訓を残したものである。彼が遭遇し又經驗したことに依つて制裁なるものは子供の惡徳を矯正し得るものではない。否却つて之に依つて彼等を以前よりも更に極惡に導き、又同時に兇惡の情は卑劣にも學校の終るを待つて此に勃然として起るも

のであると信じさせた。

第四章 お伽噺

薄暗い午後。——早く暮れる露西亞の冬。——其の頃學校は新に一學年を運び、凡ての新しい學級は組織せられた。その學ぶところは主として歴史であつた。宗教上の歴史ではなかつたがロシアの歴史であつた。夜學の教科は特に新設せられたものであつて晝の學科よりも稍々その趣を異にしてゐた。トルストイ伯は殊にその靜穩な詩を傳へやうとした。彼は此の夜學に於て繪畫を示して以てその意味を簡單に説明することに力めたのである。

黄昏たそがれとき學校に集まる。其處には何れの窓を見るも明火あかしはなく、學校は凡てが平和である。階段に積つた雪は白金の光を放ち、朦朧とした裡に語り合ふ聲は極めて低い。戸は後へ動くことは至つて微かである。子供の一人は二階へと一時に二階を駆け

走つてをる。此れ學校の始業の近づいた事を表示してゐるかに似てゐる。教室に行く。凍つた硝子窓の内は殆ど暗黒である。年長の子供や賢い子供は教師の爲に騒いで居るものを制止せんと席を前に取らせ、彼の小さい頭を擧げながら彼の眼口を正し、姿勢を整へてゐる。一人の少女は高い洋机に倚つた。その顔には注意深い性質を表し、且彼女の言はんとするすべてを思ひ殺して居るやうに見えた。數名の勉勵な子供等は遙か後の方に席を占めた。それに次で小さい子供等は並んでゐた。此等の子供等は謹慎な容姿を保つて傾聴してゐることは年長の兒童の態度のやうであつた。けれども彼等の注意の如何に拘らず、彼等が何等かを朗讀しなければならぬか、假令ば彼等の記憶に入るに適當なるものであつても誦讀しなければならぬことがあると或者はその肩から力を落し、又、或者は洋机の後ろに起ち、又彼等の一人は忽ち他の一人の生徒の後方を徐々に歩みながら彼の指をその背に當て、自ら樂みをしやうとした。

新しい物語は彼等の喜んで傾聴するところであつた。教師が想起作用を應用して生

徒の智力を發揮させやうとて同一事物を反覆せんとすると彼等の喧騒は又制止する事が出来ない程であつた。しかしよく知られてをる古い物語を話さうとすると彼等は一語一句凡て誤りなく朗誦した。而して又、それを中止せらるゝことを肯せないものゝやうであつた。若し彼等が過つて省略したのを注意すれば、再び彼等自身はその物語を完全に譚し終るのが常であつた。

少しも動搖しないこと恰も死人のやうである。彼等は遂に眠つてゐるのではあるまいかと、窓に近づき小さい子供の顔を注意するに彼は座ながら彼の視線を教師に向け澁面を装ひながらも彼の強い注意を拂つた。暫時して一人の男兒がその手を力なく前方に伸ばさうとすると前のは肩を上げて之を受け止めやうとした。その手は彼の首を標ぐつた、けれども前のは決して之に對して微笑すらしなかつた。遂に彼は遁げるやうに彼の頭を抱へた。彼は額が二つに裂け空曇るといふその不思議なお伽噺に對して十分に心を傾け、一たび苦痛を感じたが、後ち更に彼を楽しめるものがあつた様である。

今や教師は此のお伽噺を譚し終つた。子供は小躍して喜び初め又雜踏を極めた。皆他に劣らじと聲を高くして今如何なることを彼等が學んだかを反覆した。教師は彼等の喧騒を制止しやうとして汝等は凡てを能く記憶したといふことがわかつたと告げた、けれどもそれに依つて靜肅になるとも見えなかつた。これに従ふものさへなかつた。彼等は他の教師のところに行き、若し教師の見えない時は、同輩又は珍らしい人若しくは彼等の好きな人の傍に行つて熱心に語り初めやうとする。彼等は自分一人で之を反覆練習することは甚だ稀れであつた。彼等は類を以て集り、互に學力の等き者と相集まつて互に朗讀し、互に尋ね合ふて相勵まし、又共に誤りを正した。遂に彼等はその問題に疲れて此にはじめて靜肅の状態をなすのである。蠟燭は今や運ばれて、彼等は次の教課を待つのである。

一般に夜學は晝の學校の擾亂に比らぶればさまで騒がしくはない。且、晝の兒童よ

りも従順であつて取扱ひ易い方である。殊に此の差異は數學及解剖、唱歌、讀書、殊にお伽噺の授業時には最も著しいものであることを見受けるのである。八時を報ずるや彼等の眼は朦朧の状をあらはし始め、往々欠伸を放ち、燭光は漸く薄らぎ出してその心を剪ることは多いのである。年長の子供は端座して少しも怠らないが、小さい子供及魯鈍な子供は教師の講義を寢言にしながら洋机の片隅から落ちやうとして白河夜船の眼を醒すことも少くはなかつた。

第五章 自由

トルストイの學校の特色であつたと云ふ一つは若し子供が自家に歸らうと希望を申出るものがあつた時には何時でも彼の意のままに之を許したといふことである。彼トルストイの文學的記録の中に此かる場合の一つを記してある。今それを力めて彼の言葉通りに述べて見やうならば次のやうなことである。

或時晝食二三時間の後に子供は大いに倦怠し、忽ち二三の子供が彼等の帽子を取つた。

『何處へ往くのか。』

『自家へ。』

『だつてまだ學校が済まないぢやないか。』

といへば、その一人は答へて、

『自家へ歸りたいんです。』といひながら帽子諸共に迂り去つた。

『一體誰がさう言つたの?』

『だつて歸つたものがあるんですもの。』

『否何うして左うするのかね?』と、教師が詰問した。そして煩勞に關らず今は次の授業の準備をしながら。

『お前は歸らないで居た方が可いでせう、ね。』

といつた。

他の子供等は厭ふべき空気を心にもせず、活氣あり氣な顔で教室にゐた。

『お前は何を待つてゐるんだね?』と、教師が歸るのを止めたその子供に向つて稍々酷な口調子でいふ。子供は猶躊躇して佇みながら帽子を放さず。

『彼等は已う何處へ往つたんだらう。あゝもう鍛冶屋の前を通り越したやうだ。』

二人の子供は急に教師に、『さよなら。』と叫びながら外へ往つてしまつた。

子供をして自家に歸らうと決意させたものは誰であらう。その子供は心に何と感じたかは、之は知るに由もない。彼等は熟慮することなく、たゞ、悪いことに倣ひ、遂に彼等の家へ急いだのである。

『皆歸りかけたんだよ!』と、呼ぶ聲が間もなく二階のひくい階段から聞えたかと思ふと、少年は雪合戦をしながら又、猫の様に躍りながら我家へと村路を急ぐのが見えた。

斯くの如き舞臺は一週間に一度或は二度位演せられるのは稀らしくなつた。そして彼等は其の度毎に寧ろ教師を壓服するかの感があつた。けれども教師は五、六或は七年級の生徒に深い教訓を自得させんが爲めに、又、毎日生徒を力めて學校に通はしめんが爲め一般に生徒の要求を容れる方針を取つてきた。只希望するところは子供等が或満足を得やうとして種々の困難に遭遇する場合があつても彼等が之に敵し得るやうに十分意志を強くさせやうと努力したのである。

生徒の缺席に關する問題はトルストイ伯の學校では起る道理もないのである。それは何故か?。學校に來る兒童は毫も義務の觀念を以て出席するのではなく只出席の恩典にあづからふとして來るのみであつた。此れは彼等の大いに誇とするに足るものである。で若し彼等が自家に歸りたいと願ひ出れば直ちに許され彼等を無理に止まらせる様なことはしなかつた。眞に自由の精神を持たものであつた。かく見ると彼等を只遊ばせる外何等の價するものが無いやうに見受けられるけれども教師の感化の大なる

事は遂に没することは出来まい。

トルストイ伯と生徒との間の濃厚な師弟の愛情は放課後に於て殊に著しいものであつた。日課は夜の八時に全く終るのである。最後の時間は唱歌、讀方及物理、化學の實驗に充てられてゐた。此の實驗は子供等に多大の満足を與へたのである。トルストイは放課後雪を踏み分けて彼等小さい子等と共に散歩を試みたことがしばしばあつた。

時には森を辿りあるひは斷崖の淵、其處には恐ろしい危険な狼の住む穴が遙にあるといひ傳へられてゐるほとりを徐ろ歩きしながら彼等に趣味ある事柄を話して彼等を導いて深い問題の研究に向はせて、此れ等の農家の子弟を最も常識に富む才能ある人、よく教育せられた人となるやう導き力めた。

『圖畫はなぜ必要なのですか。』と生徒の一人である賢こさうな少年は歩みを止めて尋ねた。

『美術は何故に必要なのでせう。』トルストイは此の問ひに何と應答してよろしいかと躊躇した。

『杖の必要は何うです。』

『樹木の必要は何うです。』

小さい一人仙嘉は彼の杖でもつて眼の前に植つてゐる喬木を打ちながら尋ねた。

『ぢやそれが切斷れる前の夏に何うしてその樹木が必要なのであらうか。』

彼等は自から導かれて自然の美とその必要とに關する深遠な問題を思考せんとし、又其れに對して相當の解釋を下して以て樹木の美に向つて結論しつゝあるのである。一少年は樹木を殺伐するは遺憾である。何となれば其れは生命を有するものであるからである。と、告げて、

『此の樹液は活きた吾々の血液のやうぢやないか。』と彼は斷案を與へた。

彼等はこの様に眞面目に話し合ひながら逍遙すること暫時にして忽ち子供の一人は

感極まれるものゝ如く伯爵の手にすがりついた。

トルストイは生徒の境遇を省みずに、唯徒らに高く導かんとするのは農家の精神に悖るものであるといふことを大いに悟りその教化の精神の誤つてはならないといふことを自から戒めたのである。

『これ等の子供は烈しい労働に堪えなければならぬのです。』

『凡ての子供を美術家や哲學者になさるお考へですか。』と、ある人から尋ねられた。百姓の心は地主のいつたことが最も自然である。智力の要求及精神鍛練の満足を以て適當な將來の農民とするを希望してゐるのではない。

第六章 教授法

ヤスナイア、ボリアナのトルストイの學校は決して授業料を徴集しなかつた。生徒は凡て約四十人であつて此の中に四五名の女生徒もあつた。然れども出席生徒は常に

三十名を越えなかつた。子供の年齢は一定してはゐなかつたが大ていは七歳から十三歳、稀には已に丁年に達したのもあつた。其れは少年時代に於て十分な教育を受けなかつたゆゑに特に此處に學ぶことを願ひ出たのである。教師は都て四名であつて毎日六七時間の教授を授けてゐた。トルストイは經驗のため且、實驗のために此の學校を經營したのである。

彼は各地方の思想及活動に關する凡ての傳説、或は習慣などを研究せんと思つて生徒等を之に解答せしめた。斯くして教育の實際的効果を求めやうと力めたのである。

けれども此のことは容易な業ではないのである。それが必ずや凡ての人に歡迎せられるとは限つてゐない。又それを彼等に強るに難かしくて彼等自身をして十分考案させることが出来ないからである。而もそれは時間を尊重することの強い觀念に依つてではなくて徒に之を拒むのであつた。トルストイ伯は直ちに結論して學校をして同一

の方法、同一の命令を遵奉する軍隊教育のやうに考へるのは至愚の策である。眞の自由と稱するものは假令命することがなくともよく彼等の個性に相當する考へを以て必要な方面を發見するであらう。彼は又彼獨特の教授法でその村の教會で取る方法を比較研究し、兩者を對照したその結果村長をして次の三箇條を制定せしめた。

- 一、教師は常に注意して生徒に簡易な教授の方法を擇ばなければならぬ。
- 二、生徒の理解に容易でない教授は生徒に對して十分な教授といふことは出來ない。

三、教授の法は只生徒に満足な心を與へることが出來れば足る。生徒に満足を與ふるには生徒とその自然の天性との間に一致しない點に注意する必要がある。

トルストイは文典を學ぶに基礎となる舊式の學科を選定したが、此の學科は殊に生徒に興味がないやうに見えた。文法の方則を學ぶ目的は國語を誤りなく話すにある。然れども其の方則を知らなくとも完全に話し得ることは申すまでもない事である。こ

こに於て文典教授の價值があるといふよりも寧ろ主として精神力の鍊磨にあると思考しなければならぬ。

文典の教育的價值が果して右の如きものであるならば更に他の有益な方法に依り最も簡易に其の目的を達することを考へなければならぬ。

トルストイは國語教授として最良の教授法を作文の實習に案出した。

第一級及第二級に於て生徒が既に學んだ問題を擇ぶ、その多くは已に授けられた舊約全書にある物語であつて教師から約二ヶ月前に聞いたものであつた。第二年級では或一定の題を與へて綴らせた。例へば麥、家屋、森といふやうな問題。けれども子供に取つてはその題を取扱つて宜しきを得ることは甚だ困難であつた。教師が之を容易にせんが爲に注意を與へても猶彼等にとつては容易ではないらしく見うけられた。麥粒の發達、その變化及効用等に就いて生徒の注意に訴へると彼等は不精無精な態で始めて筆を取る。しかしその作文の結果は意味及文典上の誤謬の多いものが出來上つた。

此に於てトルストイは其の教授法を代へ、初め彼等に或事件^{ことごと}を物語らせて一度は彼等の満足を得、而して今彼の話しだ新しい記憶の事柄を誦述させる方が彼等に偶然、機などを説明記述させるより遙に容易であるといふことを發見した。或單純な一課題を興へて文を作らせやうとするは一見教師には生徒に對して最も簡易な様に見えるが、子供にとつては決してさやうなものではない。生徒は往々反對の方面から事物を観察せんとするものである。従つてその複雑な状態にばかり注意する故に之を綴ることは生徒にはなかく困難なのである。

トルストイは教科書を用ふるに常にその汎論から始めた。文典は形容詞に始め、歴史は時代を分け神代から始め、又、幾何學は點の定義及數學上の方面から入つた。けれどもその汎論から教授を始めることは生徒の理解に困難である。生徒はそれに關する或一般的知識と明かな理解力とを有してをらなければならぬ。洋机を完全に説明せんが爲には哲學上の高尚な觀念を有たなければならぬ。子供はこの説明よりも寧ろ椅子に就いて書くことを望むであらう。愛情或は憎惡の感情は——彼のジョセフ兄弟の會合若しくは彼の敵に對する私憤の情に於て何れかその一に表れるであらう。

課題は或特殊な事柄を生徒に擇ばせる。即ち彼等の熟知する或人物に就いて、或は彼等が記憶してをる物語中から選擇させる。かくすれば彼等は文を綴るに最も容易である。自家に歸ると直ちに筆紙を取つてお伽噺を書き始める。又彼等はよくそれを批評訂正する。學校にあつては長く悩まされ、又綴ることの出来なかつたやうな事、或は反覆誦讀して猶記憶に止まらなかつたものも今は自家に於て容易に彼等は其の技倆を示す様になる。

或時一生徒は作文を朗讀することを厭つた。それは他の子供の作つた文が遙か自己の文章に勝れてゐることを確めたからである。即ち遂に他の生徒にその文を讀ませたところ前に拒んだ生徒はその文の原作者が何人であるかを想像することが容易であつた。

トルストイは作文に達せる二人の模範生徒を得た。その一人は十歳になる平藏であつた彼は一定の題目に就いて作せるものよりも、トーラへの旅行を記述した一文は殊に容易であつて且出色であつた。今次に彼が作つたといふ作文を示さう。

『麥粒は地にその芽を發す。初めは綠色なり。然れどもそれが少しく成長せし時には穂を生じ、女子此れを刈る。又此の外更に草の如く家畜の食料に供すべき麥の一種あり。』

以上は此の題について凡て彼が考へ出して作つたものである。彼は此の文章の甚だ拙劣であるといふことを知つて、大いに自から恥たけれども敢て之を修正するの勇氣はなかつた。次に彼のトーラ旅行記を示さう。

『私が未だ小さい子供であつた頃、たしか五歳位であつたらう。私は人からトーラへ行つた話を聞いた。然し私はそれが何處にあるのかも知らなかつた。で私は父に尋ねるやう。

「父さん、トーラといふところへお出でになりましたか其處はきれいですか。」

父は、

「きれいだ」と、答へた。

さて私はまた父に頼んでいふやう。

「伴れて行つて下さい。父さん。私はトーラを見たいんです。」

父は答へて、

「よろしい今度の日曜にお前を伴れて行つてやらう。」

私は喜び駆け出して椅子の上に小躍した。日は一日一日と過ぎて日曜は來た。私はいつになく早く起きた。父はと見ると庫の横地で馬の具束に取りかゝつてゐた。で私は力の限り早く自分の身仕度を整へた。私が外へ出た時には馬は最早用意せられてゐた。私は櫓に乗つて出發した。

私どもは十四露里、力の限り走つた。と私は一大教會を認めて我知らず叫んで、

「父さん大きな教會ではありませんか。」

父は答へるやう、

「今一つ小さい教會があるよ。それは小さいけれども、もつときれいだ。」

父は其處に私を伴れて行つた。私がそこへ着いた時丁度教會の鐘が鳴り始めた。私は稍々恐れて、太鼓喇叭の餘りに騒がしいのにたへかねて、父に尋ねた。と父は、

「いゝや、あれはお祭りなんだ。今始まりかけたのよ。」

直に私等は教會で祈禱した。それが終つて私等は市場に行つた、そして其處で私は行きつ、歸りつしながら、何處も彼處見物した。私は市場で菓子パンを賣つて居るのを見出した、而も私はお金を拂はずにその幾つかを取らうとした。すると父は、

「取るんぢやないよ、取るとお前の帽子を取られるよ。」

私は何故彼等が帽子を取るのか、と父に尋ねると、

「お金を拂はないからだよ。」

そこで私は父に、

「私に五錢下さい。パンと菓子とが買いたいです。」

父に私に金をくれたので私は菓子とパンを三個買った。私はそれを食ひながら、

「お父さん。うまいお菓子よ。」

といった。

私等の用事が皆終つたから私等は自分の馬のところへ歸り、馬に水と牧草とを與へた。馬が牧草を皆食べたので馬の用意して家へ歸つた。私は家で衣服を着換へてから皆の人にトラへ行つた事を話して、父、私とが、如何様に教會で神に祈禱したかも話した。暫くしてベットに入り、そして私は父が再びトラへ行く夢を見た。私は飛び起きて見ると皆の人はよく眠つてゐたのでした。そこで私も再び眠つた。』

トルストイが農家の子弟の美術的才能を尊重して之を作者として遇せんとしたことは少し誇大に過ぐる嫌がないではない。けれども彼は自己の信じたまゝに發表しなけ

ればと思つて遂にその結果を發表した。彼は其の教育雜誌に生徒の作つた作文二三を掲載し、又、教員の作つたものをも載せて評した。評に「甚だ拙劣なり。」と主張した。彼は子供が文を作る事は甚だ容易なものでないといふことを知つた。彼は遂に生徒の中に投じ、そして生徒も今はトルストイが簡単に説明した單純な題目に就いて物語を書きはじめた。彼等が書き進まない先にトルストイは全生徒を監督して以て彼等を勵ました。もし、かくする時は常に彼等は單に熟達した寫字生のやうに書き得たのである。

此の物語の第一頁はトルストイ自身の作つたもの、その他は皆子供の作つたものであつた。彼は先づ記して、

『凡て無暴な人でなければ例令小さいものであつても文學及作者に對して注意を拂ひ余の記した第一頁を読み、更に、生徒の作である多くの記事を読むであらう。又、拙劣であつて不自然で且幼稚な文體であることは牛乳の瓶を投げるよりも容易に鑑

別せられるであらう。しかし其れがどんなに拙劣であるとはいへ余はそれが凡て創作であるといふ事を明にしなければならぬ。而して余は單に多少の端緒を彼等に與へ、又、稍々訂正を加へたところもないではない。』

トルストイは此に平藏の文才を認め、彼を適當に鼓舞させやうとして、

「一般美術の主要な要件」を説いた。生徒等は四時間共に學ぶ。時間は夜の七時より夜の十一時までである。この間他の子供は多く居眠りの外何等なすことを知らない者のやうであつた。只、平藏及その好一對である仙嘉だけは日課に熱心である。

『あれが本統に印刷せられるのですか。』といふのは平藏の質問であつた。『さうです。』

『ちやあ、マカロフ、モロソフ及トルストイ共著と言ふのですね。』然れどもトルストイは平藏を目して文豪ゲーテに擬せんとはしなかつた。

『十一歳なる仙嘉、及、平藏を序々に監督して特に注意を與へた。余は彼等を導き

理解されることを自ら樂とする（唯に奨励する楽しい瞬間を経ることによつて）不幸にも此の特殊な物語は英語にも獨佛語にも遂に譯されなかつた。トルストイ伯は其の著『少年に與ふ』の書中此の物語について説き、又、それを拔萃せられたけれども遂に世の注意を惹くに到らなかつた。彼は更に平藏の文章を示した。それは兵籍に入つた身は生涯生家に還らない筈の兵士が偶然にも彼の家に歸つて來たといふことを書いたものである。此の文章は又トルストイの手に依つて發表せられた。

その第一章は稍々拙劣であつた。勿論トルストイはその作者に全然一致することの出來ないものもあつた。その物語の最後には彼の父が善なく軍隊から生還したことをも説明した。トルストイは之れを以て或種の露西亞文學よりも勝れてゐると感じてゐた。といふのは彼の父を思ふことに於て子供の満足をよく描寫せられてゐたからである。

父は間もなく外出せんとした。子供は父と共に行きたいとせがんだ。けれども彼の

母はそれを制した。彼が猶母の言葉に従はなかつたので、母は遂に彼を打つた。彼は泣き始めて、露西亞の習慣として大切なものを入れる戸棚がある。その上へ攀ち登らうとした。彼の父は再び來ていふやう、

『なせお前は泣くんだよ。』

『私はお母さんに怒つてゐるんです。母さんは私を打つたもの……。』

『もう打つなよ。おい、もう許してやれ。』

『母さんが泣かすんだもの。』

此の文は誠に流麗である。けれどもゲーテとトルストイの文學的著作を比較して露西亞文學の性質を定むるならば此れを文學とすることは遂に不可能に近いのである。

平藏と仙嘉の二人は疑ひもなく彼トルストイの學校での文學者たるに恥ぢなかつた。トルストイは稍々低度に於て凡ての子供の文學的技倆を認め得た。彼はいふやう、

『健全な子供の此の世に生れるや、吾人の有する眞善美を完全に且絶對的に調和的實現をせしやうとする。彼は又動植物界の勢力のない方面に觸れるには吾人が常に求めて止まない眞善美の認識自覺の性質を以てするのである……。けれども一生涯の各時間、時間に於ける各瞬間毎に自然に導いて彼等が生れた時よりも調和的均等を完全にせんとする。毎歩、毎瞬間に此の調和を破られやうとせられつゝあるものである。』

『教育は子供を邪道に向はせて彼等を矯正することは出来ない。更に彼を邪道に導いたならば我に彼等を教化する方法もなく、又、自由の精神も遂にその光はない。教導、子女の開發、何ぞそれ空想に近くてなほ論理に反することの甚しいであらう、その理由は他にない。子供をよく見よ。子供彼等は成熟した吾人の誰と比較しても凡ての點に於て彼を導かうとする理想の點である眞善美に最も接近してゐるものではあるまいか。彼が有してゐる此理想的意義は確に吾人の上に位してゐる。』

かも此等は皆吾々が常に要求して止まないものであつて人生を通じて調和的に完からしめやうとするものである。

第七章 誦讀及試験

ヤスナイアにあつたトルストイ伯の學校では生徒に聖書の歴史、露西亞の歴史等を教授してゐた。教師は初めその話を読み聞かせ或は語り聞かせて、次に生徒に質問して彼等を一齊に之に答へしむること、してゐた。若し質問に凡ての生徒が容易に答へることの出來得ない程に困難であれば、はじめて或一人を指名して答へさすのであつた。若し彼が答へ得なければ、又、他の一名を指名して答しめたのである。此の方法は最も適當なるものであつた。此の學校は極上天氣には三十名以上の子供が出席したが、若し天氣が悪ければ出席生徒が僅かに五名に達しないことすらあつた。教師は全體の子供等を騒がしめるやうな喧騒は決して許さず、序々に必要な方面即ち幸福なる

活氣の注意及競争的奮勵の方面に導いた。

新しく来た教師は生徒の餘りに喧騒なのに一驚した。生徒は膝に乗るものあり、背に攀ち登るものもあり、喧々とどよめくものもあつた。教師は先づ之を制止したが生徒は、なかく静まる風も見えなかつた。教師はその餘りに混雜せるに一時は殆ど氣絶を催す程であつた。と、トルストイは思ふ様、

彼等を充分に理解させやうとするには先づ彼等の騒がしい話し振り、巧みに顔や形を代へて相戦ぐその雜沓を止めてしまふ必要がある。と、

新教師は彼等に椅子によるやうに命じ、各自の質問を受け之に答へてゐた。子供等は舌訥りしながら質問し顔赧め周章の色さへ見えた。教師は微笑しながら懇ろに説明し、且その子を勵ましてゐた。

『よろしい、そして、その次は、よろしい、よろしい。』斯ふいふのは此の教師の抜けない一つの癖であつた。

トルストイは直ちに斯かる方法で以て單獨に應答するほど子供に對して無益な事はないと斷定し、斯くては師弟間に表はるべき尊重、服従の觀念に代る更に大いなる弊害を導くであらうと論破して彼は曰ふ。

『それは私は最も拙い方法であると感じた。此の光景は恰も正しい爲ねばならない道を知らない子供達を徒らに苦悶に陥し入れると同じ道理である。教師は生徒が赤面し冷汗を發して困難し痛苦の狀にあることを知り又、彼と生徒と其の歩調を同じうしてゐないことを知りながら唯徒らに一つの方則として、生徒を單獨に話させ又習はせて居るばかりであるから。』

けれども生徒を單獨に朗讀させる様にしなければならぬ必要が、なせ、あるのか、といふことに就いてトルストイは多少其の參觀者に向つて注意するところがあつた。トルストイが參觀者に注意するに子供等は恰も障害物を飛び越んとするものゝやうである。けれども拙劣なる教師は之を知らずに唯一の理由とするところは、それは中世期

からの遺物としての迷信であつた諳誦と試験とに依つて彼等を導かんとし又之を以て満足せんとするものである。此の満足を得た時斯かる教師は生徒が知らない事柄までも知つてゐると論じ去らんとするものである。

此の意味に於て斯かる教師は生徒を愚弄することを以て成功であるとなし、若しくは生徒等、彼等が知らない何事でも自覺させようと力めてをるやうである。此れは一見一理ある様にも思はれるが、しかしこれは十のものを試験するに四十の地理の知識を以て解答を促すと同理なのである。

教育上に試験の必要なといふ理由は甚だ根據のないことである。今若し或人の知識の程度を知りたいと思ふならば其人と一ヶ月も共に生活して居ればその人の知識の程度を知ることが出来る、何等難かしいことではない。

而も生徒が哲學或は歴史を學習したとすれば之に就て試験の問題に答ふる術を自ら明に會得するであらう。斯くの如き試験は學術研究に於ては形式の末であつて凡て無

用の徒事である。

トルストイは歴史教授には生徒を分けて質問した。此の方法は最も早く彼等を疲勞せしむるものであるといふことを知つた。唯大膽なものは之に答へやうとし、臆病で内氣な生徒は終始沈黙を守つてゐた。中にはその零點を課せられた時には泣き出したものすらあつた。新しい教師はその結果を厭ひ、彼の教室簿に生徒の成績不良であつて甚だ拙劣である事を書き止めた。そして

『清兵衛のやうな子供は知らない。』
といつた。

清兵衛は紅い頬に優しい眼をした頭髪の長い生徒で小作人の子供であつた。彼は仕事着の袴衣ズボンを着けて又彼の父の長靴を常に穿はいてゐた。彼の愛らしい美しい顔はトルストイの注意を引き愛を傾かせるに充分であつた。もつとも彼が數學の授業に殊に第一の成功を示したにも因るのである。彼が計算の能力と熱心なのは一時は成功した。

彼は又讀方も書取も共に可なりの成績を表してゐた。けれどもその良成績は間もなく退歩を示し初めたのである。

『彼は頭を垂れ、眼には涙を湛へ、遂に身を伏するやうな姿勢で考へに打沈んでゐた。』此れは彼の爲には眞の義死に等しいものであつた。

教師から少からざる感化を受けた。清兵衛を預かつてゐる新しい教師を恐れたのではあるまいか？ 或は高慢、虚偽を以て他と並ぶを自からその卑むべきことであるを感じて、背後に一つの強い觀念があつて彼自身を疑はしめる様になつたものではあるまいか。又其れが教師の目には怠慢であると思へたのではあるまいか？ 此の小さいかよはい精神が教師の或る鋭い一言葉のために一大迫害を興へられたのではあるまいか。此等の理由の凡てがその原因をなしたのではあるまいか？ 神は之を知り給ふであらう。

然れども此臆病な性質は到底善良な性向とはいふことが出来ない。それは明に凡ての子供の有する美しい天性の一たる活潑、無邪氣の精神を摘發せられてゐるからである。

強て之を導かんとすれば物質或は道德の定律を破壊せんとするものである。又此かる時教化すれば之と同時に他の尊重すべきすべての本性を破壊して、彼の爲には何等正しい方向に導くことを得ないのである。』

ルストイは新しい教師を諭すところがあつた。後彼は此の新しい教師に教師の椅を辭せしめた。と之を聞いた生徒等は齊しく之を喜んだ。斯くして學校も一たび改革することが出来た。之と同時に彼は直にその教育雜誌に清兵衛のことに就いて公平なる判断を以て掲載しその注意を喚起した。

マールリングは「蜂の巢の精神」に就いてその頃發表し、トルストイは四十年來「學校の精神」に就いて同じく述ぶるところがあつた。即ち彼は記して、

『學校に於て説明し難い或物があつて教師の管理を要せず、殆ど完全なるものがあ

る。その或物は科學としての教育學が教授法の成功する眞の要素を教ふるに關はらず、未だその或物を吾々が習得出来ないところである。其或物といふのは學校の精神である。新任の教師は此偉大な力を打消さんとしたのである。多少彼はその力を認めて自から鑑むるところはあつたとはいへ遂に之を破壊せんとした。眞の教育は教師が寧ろ凡ての生徒の意見に従ふことに依つて發達するのである。彼の授業時間を徒らに延長するに於ては此學校の精神は寧ろ漸衰の狀を示すものである。

供から子供へと彼等自身に任せて、教師は寧ろこれに關することなくば此の精神は愈々發輝するであらう。かくする時は音聲の調子整ひ、容姿に於て、手眞似、或は競争に於て——。必要且尊重すべき此の精神は各教師が常に撫育しなければならぬところである。其れは生徒の熱心といふ精神であつて智力開發に於ては恰かも消化に於ける唾液の如きである。殊更に作り出さんとしても作り能はざるもので唯人生の自然に表はるゝ泉である。此精神は助長すべきで、必要な目的物を提出するは

教師の一大義務であつて決して此の精神を鎮めんとするやうな舉動があつてはならない。

一人の子供が發問したとするならば、その際他の子供等は之に答へやうと色を示すであらう。その生徒は教師に對して熱心の態度を示し、彼の力の能ふ限り教師を注視するであらう。而して彼は舌の上にて言はんとするすべてを辛じて制して居るやうであらう。若し教師がその時彼に答へしめるならば、彼は性急に何と答たか自分でも知らないほどに流暢に述べ終るであらう。然し又若し教師にして彼が緊張した此の狀態に注意を拂はず、又、彼をして答へしむることなくて二十分三十分を經過するとせんか、彼は私かに自己の考へて居た答を呟き、又は彼の隣席に座せるものを捻り初め教室の喧騒をはじめるであらう。

トルストイは次の如き方法を彼の學級に試みた。それは例の雜踏をはじめると、彼は速に暫くの間教室を去つて、教室の外へ出た。外にをること少し再び教室に來り戸

を叩いて注意して此に始めて教授を初めるといふことを告げて、互に朗讀させ、又は誤りを正さしめた。彼が最初に教室に入つた時に比べると甚だ靜肅であつた。舊式の學校に於ては若し教師が教室を去らんとする時は生徒に靜かに勉強を續ける様命するであらう。がしかし教師の去つた教室は生徒等が恰も聴く耳を持つてをらなかつたかの様に直ちに風を切つて躍り廻るのである。斯くの如き反動は當然である。

ヤスナイアに於けるトルストイの學校へ來る新入生徒は愛らしく確に初めから一月ほどは靜肅にして、沈黙を守る。けれども次第に他の子供と同じ様に共に朗讀を始める頃から彼等は遂に子供自然の天性を表はし、初めの様に靜肅、沈黙を守らざる様になるのであつた。

第八章 歴史

トルストイは歴史教授に於て聖書バイブルを以て無比の教科書となし、殊に舊約全書を尊重

した其は子供に取つては他の何物よりも興味を感じてゐたからである。

トルストイは稍々微妙に此れを語つて曰ふ。

『民族發達の初期に於ける書物は凡ての子供には最も適當してをる。』

彼は此れに適ふ醇正なものを見出すに苦しんだが聖書物語の拔萃、摘要を以て他の凡ての書物よりも遙に價值がある、と、斷定した。而して彼は曰く、

『頼りない若い女子にはこれもあるひは不適當であらう。然れども農家の子弟をして讀ましむるには一句も之を修補するの必要を感じないのである。又、彼等はそれに對する十分なる尊敬と興味を感じることにについては少しも何等非難すべきところはない。』

舊約全書は殊に子供の理解力に合し、明瞭で且嚴正である。そして自然に服従する事の必要なるを説くもの之より適當なものはない。吾等は此の書を外にしてよく教へて誤らざらしむるもののあることを知らない。』

聖書は新しい且不思議な世界の中へ導くものゝ如く生徒も亦往くを願ふ様である。而して後生徒を科擧、美術の新しい世界に導くのであつて、これは教師の重大な職責である。教師は常に生徒が神に従はんとする好奇心を喚起し彼等の希望を刺激しなければならぬ。此の好奇心を喚起せんとするものは獨り聖書があるばかりである。子供は此等に感ずることは至つて大なるものがある。

トルストイから此れ等の物語を聞いた生徒は露西亞の歴史を學ぶ以前には往くを拒んだところへも神の後を追ふて行くには何物をも辭せざるの準備を表した。

人類思想はすべての方面に詩の形式を以て巧に表出せるものであつて、今の世に於ては聖書の右に出づべきものは絶對にないのである。人類の原始時代に於ける關係の状態はその家族に於て、將た社會、又は宗教に於てその各頁に古代の光景を飾つてをるのである、其れは少年の天性に従ふて明知を開發せしめ、又、子供の心を強く引付ける力を有するものである。

『若し唯物論の主張を以て聖書を書かんには、唯物論は直ちに思想界に一大勝利を博するであらう。而して子供等は其の聖書の方向にすべて導かるゝことはいふまでもない』

と述べた。トルストイは遂に結論して、「吾等の社會から聖書を除き去るならば、恰も希臘の社會からホーマーを抜き去つたと同じく子供及人間を發達せしむることは終に不可能に終るばかりである。」といつた。

聖書から他の歴史に移るには甚だ容易ならざるものがあつた。生徒はエジプト或はホニシアンに就いて何等の興味をも有たなかつた。

聖書の歴史を授ける以前に於ては露西亞の歴史を絶對に拒斥せんとする色があつた。然し聖書の歴史を授けた後は更に溫和に聽從してくれた。けれども彼等は猶國民の一代記に對して興味を有することは甚だ薄かつた。トルストイは露西亞の歴史は爾かく無趣味なものでないことを説いた。千八百十二年一月及二月に於て將官の佛國か

ら歸る章を省略した。其れはさしたる大事件とはなく、唯此等二人の將軍が肉と血とを捧げて人生本來の面目を傷けたるに過ぎなかつたからである。

トルストイの見解は大いに生徒をして慰むるところがあつた。愛國心の養成に關しては四十年以來歴史教授の一方法によつて愛國心を陶冶してゐた。始めて彼は有名なモスコフ府からの退陣を追懷して物語つた。而して彼は曰ふ様「余は決して其れを忘れることは出来ぬ」と。

彼は歴史教授に一方法を案出し近代から逆に古き上つて歴史を教授せんとした。他の教師は古代から順を追ふて教へ始めた。而して最後に歴史の途中で逆に進んで来たトルストイと古代から教へて来た他の教師と相會ふことに定めたのである。一日トルストイが他の學級に入つて見るに、彼等に約した問題に甚だ嫌惡せる狀を示したものの、あるのを見た。而して彼等は今少し物語りせんことを請ふた。彼は直に承諾して佛國改革以後に於けるナポレオンの勃興を説いた。暫時は生徒等の雜沓は止むとも見

えない。或ものは洋机に攀ち上り、又、或者はその下を匍匐してゐる。而して他のものは凡て椅子に倚つてゐた。けれども暫時にして漸く靜肅になつた。彼は彼等に何故にナポレオンは露西亞を征服しやうと決心したかを語り出した。

忽ち一人の子供は我知らず、

『何ですつて？ 彼が吾等を征伐するのですつて？』と叫んだ。

『恐れるなよ、アレキサンダーは偉い人なんだよ。』と他の子供はいった。

彼等は露帝の妹をナポレオンに配めよさうとしてその婚儀を提出し、而して露帝と協商せんとしたのを輕侮した。

『一寸待つて下さい』と手を舉げていつたのは兵十勝ベトカであつた。すると他の者は、

『構はないで、話して下さい。』と叫んだ。

アレキサンダーは其の提出を拒絶すると同時に宣戰の勅を發した。今や凡ての子供は首肯して聞くことに力めた。然れどもいざナポレオンが十二ヶ國を平定した大軍を

率いて露國國境にその軍を進めた時には人心安からず一大擾亂を生じたのである。

此の時トルストイ伯の一友人である獨逸人が、同じく教室に參觀のために入室した。

『お、貴下も亦私等の敵なんだ。』と兵十勝がその獨逸人に向つていつた。

『おい、静かにしないかよう。』と他のものは之を制した。

悲しくも彼等に惱まされるところとなつて露軍は遂に退却した。そして彼等は更に進んで我將軍を圍み大いに侮辱を與へた。

『彼のコートゾツの如きは最も哀れな標本の一人である。』

『一寸待つて下さい。』と他のものもいつた。

『併し何故彼は退陣したのでせう。』と第三者は訝しさうに尋ねた。

トルストイは露軍がポロヂノに於ける戰陣を失つたのを生徒に答へるに忍びなかつたのである。それは子供に對して一大打撃であるといふことを思つたからである。

『何うしても我々が服従しなかつたならば其那ことも起らなかつたでせう。』と彼等は惜み合つた。

ナポレオンがモスコウ府に進軍した時は市の防備の嚴かなるを豫期して人民の降服するものが多いことだらうと思つたのに、其處には叛亂の動哭は久しく止まなかつた。彼等は遂にモスコウに火を放つを可とするに一致した。その結果彼等の戰捷に歸し我軍は退陣した。トルストイは佛軍は如何にモスコウを攻め又、コートゾツが如何に追跡攻撃せられたかを語つた。

『すつかり分りました。先生。』と叫ぶ兵十勝の顔にはばつと火を放ち、彼の小さい指を固く握り占めた。今刺激せられた愛國心は教室内に漲つた。一人の小さい生徒は肩を張つて恐ろしい權幕を示した。

佛國の勢力の稍々衰へるものあるに及んで多大の同情を吾に與へるものが出た。それは獨逸が露西亞に接近し始めたことである。此の時生徒等は一齊にトルストイの友

人である獨逸人に視線を向けた。

『其れは汝の處すべき道であるか、初めには吾等の敵となり、次に吾等が稍々優勢なのを見て即ち吾等の味方となつて来る。』そして寛大を以て親しんでほしいと願ひ出たとまでもトルストイは説明した。

友人である獨逸人はトルストイが單に一面ばかりを物語りし非を鳴らして、その當らざるものあることを忠告した。若しトルストイが彼のアレキサンダーがブルシアに對する苛政、或はポーランドに於ける彼の殘忍の所業を説明したならば生徒は一刻も之を聽き捨てにしなかつたであらう。だから友人の獨逸人は物語りの半面だけを歴史とすることを拒んだのである。けれども其れは學校に於て自國史を授ける凡ての計畫に一大障害であることはいふまでもない。教科書の著者及講述する教師が虚偽の緒口を傳ふる不變の力と呼ばれるも詮なきことである。けれどもその教授法を改めることは望んで遂ひに得べからざることである。

亞米利加の歴史は露西亞のそれに比して更に趣味のあるものである。宗教の自由に對する巡歴者の移民、製業に不正の税を課することを拒み、奴隸の賣買を嚴禁した事など凡て此等歴史の中には含まれた一大教訓、これは皆高い道德的實習に向つて好機會を與ふるものである。けれども前述の方法を以て歴史を教授せんとするものではない。國民史上の所謂英雄といふものゝ蔽ふべからざる一大缺點は吾人の敵側の性質は黑色を以て彩どり、物語り、全體の上に虚偽の時代の章標を示せるものがある。其れは不道德に見える憂國の精神から人道に對して一般の愛國心を起さしめやうとするものである。凡て子供をして此の水平線まで達せしめ得ざるは明である。假令吾人が彼を導いて徳の人とせんと努力する力を示したとて、自然の力により吾人の刺激如何は關らず遂に偏狹なる愛國の士となり果つることは必然なことである。さうして殊に他の國民を見るに不正の眼を以てし我にのみよい詭辨を弄して恥ぢとも思はない色あるに至らしむるものである。

若し彼が自國の歴史を學んだ時は、其の眞固の歴史であると思考せしめ、他國の民を輕侮嫌惡するの餘り之を寛大に導かうとするも却つて彼等の苦痛とするところである。彼に先づ忠臣義士の國家に忠義であつた一節を學ばせよ、全く合理的で且彼等自身の心を以てよく之を想察するであらう。而して未だ彼の心に満たないものゝある時は彼は遂に悄然として去るであらう、學校での歴史の勢力の如何に偉大であるかは、吾人は唯辛うじて自己に答へるばかりである。余が之に關して授けやうとして今尙記憶に残つてゐるものは余が僅か一週間を以て百科全書から容易に學び得たものである。又如何に多くの人類の歴史を學んだか？ 單に全體の極小分子ではないか。なほ雜然とした不消化的食物のやうに又時代に何の關係もない知識、これが教育の眞の要素となるであらうか？ 余は遂に疑はずにをられないのである。

トルストイは生徒の歴史に對する興味を結論して純然たる文學的、即ち美術的であるとした。彼等はロムラス若くはレムスの物語を好むそれは彼等が世界中に一大帝國を發見することが出來ないからである。けれども又其れは興味あり奇怪に富むからである。彼等は移民の記録に對しては左程注意を傾けない何となればそれは何等美術的でないからである。

『子供は唯美術の活躍せる部分に於てのみ歴史を好む者である。彼の少年のためにと編著せられる背理の記述に過ぎない歴史の如きには彼等は斷じて注意を傾けることはない、彼等の好まないところである。』

トルストイは聖書を以て希臘、羅馬、獨逸及その他歴史として最も信するに足る部分の神話等は少年に用ひて最も有益な教訓を與ふる唯一の良書であると斷定した。

アレキサンダー大王乃至はチャールメーンの出帥に代ふるにトロイの侵襲を詳細に知らしめるならばそれは子供に對しては遙に價值があり、又、その精神を開發させる好材料である。子供は此の驚くべき現世界に對して自然の趣味をもつもので、そして其の満足の心を毫も害させてはならない。ウオーゾースの『ダンブルヴィア 緋アイルス 森の話』は余

が學んだ他のすべての史籍よりも余に最も深い大きな感化を與へたと思ふと述べたのであつた。

第九章 他の學科

トルストイは歴史に於けるが如く地理の教授にも一方ならぬ困難を感じた。子供等は地球がその地軸に於て太陽の周圍を回轉する事實に就いては何の興味も有たなかつた。トルストイが歐洲大陸諸國の教授を始めると、直ちに彼等は斯かる知識は毫も吾人に必要はないと學習的態度を取らうとはしなかつた。恰も歴史教授に於て彼が經驗した様に地理を教授するには先づ彼等自身の村落から初めて次第にその範圍を擴張して教授しやうと考へた。これも彼等は隣村の地誌までは多少興味を拂つたが遂に彼はその學習を倦怠した。けれども漸く生徒の好奇心を刺激して其の失敗から一活路を開くことが出來た。

彼等は他國のことに就いての談話には傾聴した。でなければ彼等に對する地理といふものは何れにもなかつたのである。

彼等は地理の談話が終ると一齊に眼を掩はんとするほどすべてのものを困難に感ずる様に見えた。

トルストイは小學校に於て地理を授けることは誤りであると結論したのである。彼は露西亞の喜劇の性質を述べたものを引用した。

『苦んで凡ての國の状態を學ぶ人は愚なことである。馭者はお前達の思ふまゝに何處へでも運んでくれるではないか。』

教師としての彼は全世界の自然、美術、詩歌などの知識に注意した。假令それ等は生徒には授ける時期がないとするも教師としては甚だ必要だと感じたのである。若し吾等が熱帶地方及南極に就いて吾人が説明するに當り、解答を要する幾千の問題は吾人の行手に横たはつてゐる。子供は地理に就いて何等自然の趣味を解することがない

い。けれども先づ第一に彼を地理に導かなければならない。さうして彼等が地理を學習するならば彼等は必ず地理の趣味を惹起するであらう。トルストイは此の趣味を達するための一手段として彼等に旅行記を讀ませしめた。余は徒らに生徒に紀行文を朗讀させることを希望しなかつたのである。更に彼等に有力なる覺醒を與ふる人として生徒にある素力を與ふるものがあつてほしいといふことを希望してゐたのである。普通の子供は此の方法に依つて、教師の豫想以上にその學習上良結果を示したのである。

彼の著『美術とは何ぞ』に於て現今の美術に就いて次の様に説明して居る。現今の美術即ち詩文、音樂及繪畫等が大氣中に窒息したかの觀がある。その發達は寧ろ逆に向下しつゝあるものゝ様である。彼は又常にヤスナイアの學校に此の意見を傳へた。子供は善良な詩歌を倦怠して寧ろ通俗な農民の謳を歡迎すると。トルストイは此れを以て最も真に近い美術を現してゐるものと見做してゐた。であるから彼が音樂及繪畫を生徒に教ふるに於て、その教授は常に凡ての物が満足するところのものでなけ

ればならないと説いたのは彼の見解としては最も自然なことであるのであらう。彼は又此に於て教師、生徒が一致しなければならぬことを説いた。彼は看破して生徒の謳ふことの巧なることは學校で學ばない以前の方が遙に勝つてゐると。然し露國民は音樂的國民であることを忘れることができないのである。又、國民的詩歌は極めて豊富で一大寶庫を藏すといふも過言ではないのである。

圖畫の教授に於ては彼は能ふ限り自由な方針で教授するといふことを試みたのである。彼は學校内にては寫生及模寫することに就いての注意を與へるだけに止めて、單に彼等をして自己の思ふまゝに模寫、試筆せしめたのである。トルストイは圖畫に就いては次の様な教育意見をもつてゐた。

「圖畫科に於て凡ての事に立到つて、教師が自分の趣味を以て生徒の自然的趣味を律せんとすることは許すべからざる一大弊害である。絶對に反對しなければならぬ。子供は教師が有すると同一の學修に伴ふ權利を有してゐるから教師の趣味の向ふところ

を曲げるも延長するも凡て生徒等の自由に一任しなければならない。』歐洲各國の最近に行はるゝ教授法を十分に研究視察せずして教育の大法を定めることの大膽であつて寧ろ愚に近いことを自覺したトルストイは獨佛及瑞西の小學校を視察し參觀し、なほ教師及生徒が授業の目的を遺憾なく達し得るかを質問した。彼は此種類の特別の研究をマーセイラース(十七世紀のはじめ頃であらう)に求め、小さい町の學校ではあつたけれどもマーセイラースの住氏は殊に知に富み、賢く且文明的であつたことを發見した、此れ吾等に何物かを教訓してゐるのである？ 要するに彼等の教育は學校以外に於て達せられたのである。路傍に於て、酒屋に於て、劇場、商店、博物館に於て、又ヂューマ氏の小説を多く讀むことによつて、彼等は教化せられたのである。此れは實によい自然の學校である。この自然の學校は人工的の學校にある通弊に流れず、又その專政的形式から脱してよくその感化力を發せしめたものであるといはなければならぬ。と、トルストイは賞讃して止まなかつた。

彼は人類の發達すべきこと、學校の眞正な教育は吾人の實世活の方面に於て更に一般の成功を示すべき事を推論した。而して此の進歩に順應する學校の努力は生徒の家庭と生活に對する一大勢力の問題を考へてみなければならぬ。又、家庭以外に生徒の最も接近してゐる社會的境遇に就いて正當な解決を與へなければならぬ。專政的道德として非難するところのあつたその優勢な教育は一の個性を決定して他の個性を作ることとは確に彼自身のやうにならしめやうとするものであると論じた、彼は斷言して、その個性の權利を侵すは不正背理のことであつて、吾等は斯かることを爲すべき倫理的權利は有たないといつた。

彼は學校に於ける此の種の教育を痛快に論ずると同時に子供の間に趣味深い對照を示した。

『憂慮、壓服は倦怠、恐怖及冷淡であることを意味するものである。奇怪な國語を用ひてあやしげな國語を機械的に反覆す。その心の幽靜なこと殻皮に潛む蝸牛の如

くそれに類することが多い。』

此の子供が學校の門を出て街路又は自家にあつては如何であらうか。

『人生を樂觀し、學ぶを願ひ、彼の顔には微笑を放ち、凡ての方法を運らして深く討究せんとする而して彼の語るやその觀念を表して最も明晰である。』

トルストイはその學校に於ける教育十五年の經驗を『公開に於ける講演』に彼の意見を演繹して結論するところがあつた。

教育唯一の基礎は自由の精神にあるとは彼の主張したところである、人類の自由は彼等自身の學校を組織して、子供の自由は何を學ぶであらうか。如何にして學ぶべきであるかに對して彼自身の精神を發揮せしむるものである。經驗は教師と生徒間に於ける最も自然な理解を示すことに依つてのみ最良の教授を發見することができる。教へた。凡ての場合に於ては自由の精神の眞の度は教師の技倆と同情との上に宿る。けれども教師は抑制することを稀にして、能く學校を統御するを一般の原理として墨守し

なければならぬ。

第十章 トルストイ最近の見解

極端論者として世に評價せられたトルストイは千八百六十二年以來専ら兒童の研究に従ひその考察經驗は又更に大なるものがあつた、絶對の自由を以て理想とし、子供をして此の意味に於て殆ど完全な人たらしめんと努力した。最近の彼の書簡に於て彼が最近の教育的意見をほめかしたものを認められた。彼は教師をして學校時代の啓發者としたけれども、生徒の先天的に有する自由の精神及満足の心を害はいやうにといふことを要求したのである。此の精神を以て經營せられ、此の組織に成功した學校は何れにあらうか？

『生徒等は眞心から學ぶことを希望して、此の強い希望を以て彼等は來るのである。此れは實に學習上に於ける絶對的に必要な條件である。此の絶對的必要條件は恰も

空腹に食を供すに似たものである。』

トルストイは生徒の缺席、怠慢はその罪生徒よりも寧ろ教師の責任であるといつた。即ち教師は生徒等に學校は最も愉快な所であると思はせなければならぬ任務であるからである。

自由の精神を必要とする理由は甚だ多い。聰明な兒童は彼の魯鈍な生徒を前に推すべき自由がなければならぬ。生徒は如何なる問題に向つて最も同化し得るか、又生徒の特別な傾向、個性は何れにあるかを教師に教へるも亦此の自由に外ならぬのである。若し學校に於て自由の精神を養はなかつたならば生徒は何れの社會に於ても此の大精神を發揮し得ることが出来ない。彼が若し一たび學校教育に於て自由の精神を體得したならば、彼は遂に之を以て人生に最も必要なものとして注意するやうになるであらう。學校の勤めは寔に彼等が學習せんとする希望を與ふるにあるのである。

「規則正しく養育した兒童は學習に於ても亦規則正しいことを喜ぶものである。即

ち昨日午食後一時の授業があつたとすれば彼等は今日も午食後一時の授業があつてほしいと希望するであらう。』

彼は十七時間の授業中「教育」に専心捧げられる時間は其の半分にも足りないものであるといつた。即ちそれは休養の時間の残りを以て教化せられるものとしたからである。彼は又教化の主なるものとして生徒自身或は自家のために又は他の人のために働くことも其の中に數へた。例へば掃除、小使の用達、料理の手傳、燃料の準備等までも包含させたのである。

『他の半分の時間を以て教授に充て、與へた七問題の中子供に最も面白いと感じたもの單に一問題を選ばしめた。』

子供を教育する上に就て何等新奇を銜ふ方面に走らせず、又生徒をして何等他の方面に轉導させやうとしなかつた。理論に基いた學校の計畫を豫定することも絶對になかつた。教師及生徒の招待若くは補助を喜ばず、はれども彼等が存在としての

必要な適當な境遇を作ることの必要なことを知つて、漸時に將來の發達に導き或ひは全くその發達に任せやうとした。

『圖畫及音樂に關して、洋琴^{ピアノ}を教ふるは誤れる教授を組織する最も大膽な表示であるとした。圖畫に於ても——子供に對しては常に接近してゐる用具の使用法を教へなければならぬ（圖畫に於ては白堊、木炭、鉛筆等又音樂に於ては彼等自身の聲音を媒介として何をか聴き又何をか見得るかのを與へなければならぬ。此の精神で以て初めなければならぬ。更に其の結果の遺憾とするものがあつたとしても少數の模範兒童は彼獨特の技倆を輝して、或は油色を以てその作畫を彩色することを學ぶであらうし、又或者はよく高價の樂器と樂むものもあるであらう。』

『此の初歩の知識を教授するに當つて最も善良な一教科書がある。それは一冊の手帳である。』

『國語の教授に關しては更に巧妙に教授せられるであらう。佛蘭西語、英語及出來得るならばエスペラント（世界語）等は種々の方法に依つて教授せられるといふことを信じた。その一方法としては彼の熟知する自國語に依つて現在學習してゐる書物について他の國語を讀ましめる様兒童を導くのもよい。又一般の意味を捕捉せしめ、或は時に最も重要な言語の語根、文典の形式から考察をするやう勉めしよ。』

以上はその手紙中にその教育的意見を述べたものであるけれども、トルストイが立ちどころに認めたものであつて彼は公表を希望しないことであらう。けれども彼は教材に深遠な思想を興へなければならぬと説明したものである。其は現今教育上に於ける最も困難な事實の一であつて休養の残す多少の時間を以て非凡の方を授けやうとするものゝやうである。けれども生徒自からが爲さんとし、希望と満足とを以て通學して來ることを記憶しなければならない。又過勞に對する最上の救済も亦自から生徒自身の手にあるといはなければならぬ。

トルストイは露西亞語は事物を説明するに孤立の姿であるやうな觀あらしむるから、寧ろ外國語を大いに賞讃してゐた。であるから外人があつて少しの露西亞語を學ぶにも多大の困難を感じるといつた。小さい子供は諸種の外國語を學ぶにその容易なこと恰も自國の語を學ぶやうに何等の努力も研究をも要しないやうな有様である。此れに反して國語に對して何等特殊の趣味を有たない。この國語に對して何等の特殊趣味も有たないものに向つて、外國語を教ふるの價値があるか如何、大いに疑ふべき餘地がある。けれども學ぶを願ふものに對しては徒らに教ふるを拒むといふのではないと論じた。

千九百〇二年頃に認められた文書類は『論文及書簡』として出版せられた。此の書に依ると彼が最近の教育的意見には多少の差異あることを認められるのである（此の書は倫敦のグラント、リチャード紐育市フランク、アンド、ワグナルス出版會社から千九百〇三年に出版せられ紙數三百三十八頁から成つてゐる）。

彼は多くの文字を費し口を極めて『子供には量少なく教へなければならぬ』と主張した。なほ加へていふ彼の主義としては『教育から得た不消化は教育によつて子供を害ふものである。』といふことを多く學ぶものがあるのは甚だ愚なることであると説いて『寧ろ教ふるに少なかれ』といつた。彼は自由の養成に就いて多大の注意を拂ひ、子供が先天的に有する自由の萌芽を導いて誤らしむるなと警醒した。彼等はその學んだ事物を只そのまゝに保存するのではなくして寧ろ彼等の爲すべき道は何であるかを自から學ばしめなければならぬ。

善良な教育としての第一條件は、人の要を辨する凡ての事物は、偶然に天から賜はつたものではなく、それは凡て他の人々の勞作に依つて作り出されたものであるといふことを知らしめるにある。かく教育すれば彼はその靴を召使人に磨かすことを尙恥とするやうになるでせう。『その人は彼に對して純な愛を捧げてそれをなすのではなく或他の理由があるのである。』が彼にはそれを理解し難いからに依るのである。』

『若し彼等の中に更に恥づる色もなく、又更に續いて彼の召使を使役して恬然恥ぢないものがあるとするれば、其れは教育の大本を誤るの甚だしいものであつて、彼の全生涯に此の痕跡を止めて遂に洗はるゝことはなからう。』

凡て彼等に屬することは彼等自から手を下して爲すやうにさせなければならぬ。例へば彼の肌衣は彼に洗はしめ、湯槽の水は彼をして運ばしめ、彼をして洗ひ清めしめるがよい。彼の室の整頓も、衣服の整頓も靴を磨くことも彼自からなさしめ、机の配置も彼に爲さしめるなど彼に屬する一切の事は凡て彼等の手に訴へなければならぬ。此等のことは或は左まで必要ではないかのやうに見えるが實は然らずして若干の佛蘭西語若くは歴史の知識よりも子供の幸福に對する唯一の資本となるのである。

此等のことたるや何處に於ても之を爲さしむるに甚だ容易である。例へば彼をして臺所の仕事を手傳はしめることも出来れば、子供の爲めに兩親が手を下して、如何に

父母が此等の家事を整理するかを目撃せしめ子供が自分で十分なし遂げられる様實習させるが可い。子供は幸に發達の力に富むものである。彼等の社會を説明して二つに區別することが出来る。其れは即ち長上と服従者の二つである。此の區別と兩者の權義を教へずして徒らに四海同胞とか或は所謂基督教の隣人を愛するとかの義務を説くやうなことがあると、彼等は根本に於て已に誤れるものゝあるを容易に發見し得るのである。又、彼等は父母教師の信仰、道德をも疑ふに到るであらう。

『自由出版の片葉』は倫敦に於て出版せられたがその一論文に於てトルストイは自己の教育説を宗教的教育の範に落ちざるを得ずと記した。(自由出版の片葉は四卷より成る。)

トルストイは子供は人生の神祕に關して本能的性質を有するものゝあるを看破し、彼が向はんとする邪道、不道德を救ふものは單に宗教があるばかりであると主張した。

『子供の有する根本的觀念は凡てに於て漠然たることを免れない。それは彼の實在性に原因し、その力は彼が求め出した精力であつて此の根本的觀念に進歩の跡を示すけれども言語を以て定義し説明し得ない所である。けれどもそれは一般的國民として最も自然なる意義といふことが出来る。而も忽ちにして彼は之を個人的品質よりも更に價値の少ないものとしてその根本を代へやうとする。即ち自我の意志及恐るべき惡魔を見るであらう。此れ猶太の神に對するものではないか。』

子供に『人と交るに愛を以てせよ』といふことを幸福の道であると教へるならば、彼は『放恣なる神の幻想』の上に信仰を得るであらう。その永久的制裁は彼をして自由にすることが出来る。けれども此の實在は凡て吾等の上に横はり、盲目的な信仰は只徒らに隣人を愛すべきを説くばかりである。

『若し余が子供に宗教の實質を教へやうとするならば先づ余は彼等に吾等が此の世界に生れて來たことについて説かなければならぬ。さうして此の世界に生活し吾等

自身の意志に従ふのではなくて吾人の呼ぶ神の意志に従ふのである。故に意志は吾人が此の意志を完成した時にばかり吾人に幸福となるのである。而も此の意志は凡て吾等をして幸福ならしむるものである。吾等の幸福となる道に只一つの方法がある、凡ての人が願ひ好んで他の人のために働くならば他の人も亦遂に我のために働かざるに得ざるやうになるのである。』

『如何にして此の世界の表現を見たか。又、吾等の死後は何れの地に向ふべきかの問題に答ふるならば、第一の問題に就いては余の無學な認識を以て答へるであらう。斯かる不思議な問題は佛教の世界に於て見ないところであらう。第二の問題に對しては吾等の死から導いて神の所謂福祉の世界に入らしめやうとする神の意志を臆測して之に答へなければならぬ。』

第十一章 米國に於ける實驗

ヤスナイア、ボリアナに於けるトルストイの學校と同じ様な種類、性質を以て紐育ブルツクリン市外に一小學校が設立、經營せられた。

余は偶々此の小學校を參觀してその性質を調査し以て此の章を成すに至つたのである。其れは數年前エフ夫人の手によつて創立せられた幼稚園である。此の夫人はトルストイの學校教育に於ける經驗に就いては全く夢想だもしなかつたところであつた。けれども彼女が之を知つた時には彼女の精神を悦ばしめ、又彼女に新たな勇氣を與ふることの大なるものがあつた。

幼稚園の經營にあつたこと八ヶ年の後此の女史は幼稚園の組織に想到し初め、遂に舊組織の影響を脱して此に一大發見をなさうと努力した。又、彼女は注意綿密に兒童を研究し、遂に結論して曰ふ様、生徒は先天的に純良な本能性を有してゐる。學校の教育は此の本能性を害はしむるばかりであつて何等彼等に與ふるものはないと。彼女は又最良の方法は子供自身の方法に由らしむるにあるを知つて、彼の自ら發達するに

任せ只その補助を與ふるに止めなければならぬ。教授は子供の要求するものに對してのみ答ふれば足るとした。

此の觀念は彼女の幼稚園の管理をして成功せしむるものであつた。彼女は子供等は自力を以て進歩するものであることを注意し、此の方則によつて教へられた子供は他の子供より遙に優秀なことを知つた。更に注意すべきは彼女が殊更に教へるといふ事がなくともその間に生徒等は自から自分達の考へを以てよく學習の準備をしたことである。彼女は遂に幼稚園を棄て、彼女の所謂絶対に自由な一學校を設立した。凡ての組織は未だ學校といふに足らなかつたけれども子供の進歩、人生に於ける眞の經驗に導かうとした。

子供に進歩、發達せんとする強い傾向のあることは事實としてよく人の知るところである。凡ての子供は朝まだき日の東に出るや直ちに起き出ることを好むものである。これは彼等の天性である。若しこの早起の天性を破つて朝寢の習慣が生じたとしたな

らば其れは何れから来たものであらうか。子供等は家事の凡てを手傳ふを悦び床の掃除、道具を整へることなど彼等は楽しんでやうとする仕事の一つである。彼等の教育時代に於ては此等の勞作を學ぼうとの希望が如何に多きか指を屈するにいとまもない程である。年少の子女はあくまで共同して事に従ふことを好み、父兄は彼等に社會の狀態を教へんとしても教へ能はない。けれども子供等は自から之を習得して來るのである。何れから彼等がその雜多な知識を學んで來たかを探知するに苦むものがある。

エフ夫人は之等子供の天性の示す傾向を善く保護せんと思ひ、只その發達に清い美しい機會を與ふることばかり希望してゐた。なほ彼女は多くの人々がする様に徒らに子供に干渉するは子供を害ふに過ぎないものであると結論した。又、彼女はその學校にふさはしい「運動場」ともいふべきものを設けた。朝八時から午後四時まで毎週毎日子供等は楽しく遊ばうと集つて來た。エフ夫人及近家の子供の保護者は生徒に交つて尋ねられ、ば助言を與へ、必要な時には親切な看護をしてその下に十分な運動をさせ

やうとした。

此の學校はニユーロツチエルの停車場に近いといふことは嘗て友人から耳にしたことである。而して其處は最も騒がしい所であるといふことも告げられてゐた。ブルツクリンまで電車を取りそれから徒歩しなければならぬ。その上學校の建築物が何處にあるかを尋ね出すになか／＼困難であつた。果たせるかな町の最も雜沓した所であつた。三四の子供が鍬や箒を以て雪を拂ひながら階段を掃除してゐたのを見てその門に近づくと、彼等の或物は余の尋ねるに答へて敬禮した。或物はいと丁寧に、又、或者は稍々薄く。余は戸を開いて入るに學校は聞いた通り恰も運動場である。儘に廣い運動場であつた。

其れは大きな誠に心地のよい一室であつた。稍々詳しく説明するならば、其處は建築が凡て堅固であつて、其處には木造の小さい椅子が配置せられてゐた。生徒等は教室の中央に立つてゐるものもあれば、彼方此方に立ち集まるものもある。又二三の生

徒は床の上に足を空にして坐つたものもある。子供及少女のあるものは椅子に倚つてゐる年齢は五歳から十二歳までであつて一定してゐない。生徒等は字を書いて居るもの、畫をかくもの、話すもの、叫ぶものと種々雑多である。エフ夫人は二人の友人と此の室の中央に座を占めてゐた。生徒等は微笑しながら自分に適してゐるものゝ如く満足の色を以て習つてゐた。

余は別室にエフ氏を訪れると彼は椅子に依つて事務を取つてゐるところであつた。そばに一二の子供が彼を見守りながら、彼等自身の日課である遊びに耽つてゐた。エフ氏は法律家である、けれども午後だけは紐育の事務に所通ひ、午前の半日を此の學校に與へるのである。エフ夫人は何等の報酬もない教育の爲に終日を捧げてゐるのである。

エフ夫人は子供を従へ家政の全般に當り、料理、洗濯、裁縫は素よりその他家庭の一切を手一つにしてゐるのであるが、子供等は彼女の監督の下にいつも楽しい幸福な月日を送りながら育てられてゐた。生徒は凡て十五人。此等の生徒は社會の種々なる階級の生徒を合せたるものであつた。學校の位置は恰も上流の家庭に隣してゐたから時々非難の聲を聞かぬでもなかつた。しかし其れは隣家の一つの義務に過ぎないであらう。エフ夫人は何れの學校に於ても然るべきであらうと信じてゐた。二三の子供は學校にゐるところの苦學生であつた。此れは左まで困難を見なかつた。彼女は苦學生の級に於て少し許り教育上の新觀念を興へなければならぬ經驗を得た。それは常に彼等が授けられた古い學科に於て成功することであつた。

生徒等に依つて演せられたワグネルのニーブラレグリード及ワルキューエルを合せて演せられた劇があるのであつたが恰も到着が一時間餘り遅かつた爲に之を見ることが出来なかつたのを甚だ遺憾に感じた。余は厚紙に畫かれた背景の繪畫の一片及演者の衣類の横たはつてゐるのを見た。又驚く程に着色せられた鳥が次の室に懸けられてあつた。一見實物その儘で今にも飛ばないかと疑はれるほどであつた。余は嘗て斯か

る光景を見たこともなく。又、斯かる詩劇を見たこともなかつた。余は此の鳥の一幕が演せられるのを見ることの出来なかつたことを遺憾に思ふ。猛ましい龍が我足の前に横はつてゐる。此の光景は何といふ趣味深いものであらう。余は此の少時の參觀に於て多大の興味を興へられた。彼等は又外にも冠の裝飾、絨衣及組絲等を示してくれた。一二の子供は嘗て詩劇を見物して此の演藝を企つるに何等人の助言を借らずに自から之を完全に演じたといふ。此れは所謂トルストイのいつた子供の見る活潑な想像心、興味の説に向つて有力な實驗を興へたものである。エフ夫人は單に洋琴を以て僅かな音樂の補助を興へたに止まり、年長女生徒は僅かに十三歳であつた。けれども自から種々の曲を奏し得た。而も彼女は僅かに一度の練習を授けられたばかりでよく巧妙にその一曲を奏し終つた。これも只彼女が他の人の技能を觀察して僅か一二の質問を夫人にしたに過ぎなかつた。全く彼女自身でその技を演じ終つたといつてもよいほどであつたと。

此の少女は恰もワグナーの爲に選ばれた美しい樂手のやうに此の詩劇に表はれた人物を巧に動かさせたかのやうである。他の子供はよく彼のベートウベンに擬すべく而も彼の人を惹く琴の「そのた」の一曲はまことに美しいものであつた。年少の男兒は殊に或種の進行曲に一段の技術を持つてゐる。彼の多くは圖畫に興味深く彼等の作品を見るに或ものは彼等の手自から工夫し、又一片の木を得て之に巧妙な細工を施して居る。子供等は互に自己の作品に就いて誇り顔に示して絶対に自己の手一つで創造したかのやうに自稱してゐる。此の小兒に特質なる傾向は普通の教育の他の方面を忘れしめんばかりである。

彼等の圖畫を始めるのを觀るに何物にもよらず、彼等自身の創見を表す事が多いのである。一少年は森の樹木を畫かうとし、又、其の横に道路を畫き加へやうとの希望であつた。彼は森の繁みから斜面にその紙の上から下側に沿へる道路を見せんとするのであつた。エフ夫人にその繪を示していふやう、

『先生これを甚麽したらよいか私には考へても分りません。』
と更に言ひ足して、

『それを道のやうに見せたいんです。併し何だか柱のやうぢやありませんか。甚麽したらよいでせう。』

『さう他人がこれを道路と考へづくまでには五六年もかゝるでせう。これをかくのにはお前は随分長い間かゝつたのでせう。』とエフ夫人は笑みを含みながらいつた。

斯くて數日の後彼は他の繪畫を持つて來た、それには一見道であると知れるやう巧に畫いてあつた。而もこれは彼自身の手に依つてなつたものであつた。

『讀方書方及算術の必要であることをどうして彼等にお教になりますか。』とエフ夫人に質問すると、

『併し全く彼等自身で學び得ないんですから。』とエフ夫人は答へて、

『子供はばつとり生れたまゝ此の世に居るのですから、遂には確に彼等の方から教

へを乞ふやうになる道理です。それは其處に知りたいといふ一つのものがありま
す。其れは彼等が切に切に學ばんと希ふ所の所謂求知心とか知的興味とか、知的情
操とか申すものなのでせう。而して善き教育の道は知的懇望の念が讀めるまでは非
とも待たねばなるまいかと存じます。そして然る後に正しき道を授け導くことも決
して遅くはあるまいと思はれます。丁度御飯を食べると同じ事でございまして、食
慾の十分なる時にのみ適當に與へることが肝要なのでせう。若し咽喉から食物を嚥
下する力のない子供に食物や知識を無暗に與へて御覽なさい、屹度不消化の後には病
氣破滅といふ自然律に支配せられるだらうと思ひます。』

余は自己の經驗に訴へて悟ることがある。多くの善友が來て私が未だ書物を読み終
りもしないうちに善い書物だと思ふまゝ私に貸與せんと迫ることがあつた、私は頑固
に似た良心であつたけれども私は貸與せられるまゝ買はずに一書を読んだことがあつ
た。其の時私の意志は遂に其れを非道なりとして拒んだ。其れからは決して書を他人

に借らうとする徹心さへも起らなかつたとは遂に告げ得なかつた。而して余の興味が或特殊な一問題に集注した時、或は余をして大真理の迸る快著に接せしめた時、余は遂に讀破して我身の物と消化しなければ止まなかつた。而も此の種の書物に對して常に斯くあつて余を年に月に薄弱にした。これ素より好ましくない機會に逢へるものであつた。今子供或は成人の食慾について考へ見るに、若し彼の食慾の精力が病弱であるとするならば此れを治療すべく醫師は匙加減を試みるのである。けれども彼の意志の病に對しては遂に之を加ふる何等の藥石のあることを知らない。

子供は先天的に知識を要求する能力を持つてゐる。であるから凡て吾人は之に對してその好機會を與ふるは最も肝要である。子供は學校に於て書くことを好み、又遊戯を好む。遊戯に向つては専心餘念がない、偶々參觀者があつても何等介意するところはない。倦怠すれば直ちに之を外面に表し、次には如何に爲すべきかと惘然たる姿で以て尋ねるのである。學校は朝に吹く嵐があるとも決して彼等の熱心な態度を失はしめ

ないことが必要である。

子供はお伽噺を大いに好むものである。時には之を望んで止まないこともあれば數日之を楽しみ考へることすらある。遂にその物語に連關して他の話を拾ひ集めて自己の好んでをるお伽噺を此の書中の物語りから見出さうとし讀むがまに／＼今は其の一字一句、彼の一語を自から學ぶものである。

エフ夫人は普通の教授法を笑つて、

『私は一疋の猫を見る、汝は一疋の猫を見なすか。』

凡て人は斯かる調子に従つて話すものではない。然るに何故斯かる調子を以て學ばなければならぬのであらうか。

余は子供が書物に對して極端なほど甚だしく好む場合は彼女は如何なる方法をとるかと尋ねた。

又、校外散歩を拒むの理由を尋ねたところ彼女は、それは唯彼等を導くに不自然な

條件ばかりであるから。未だ斯んな不規則的な子女を見ないから、と答へた。

算術は常に子供等の學びつゝあるところである。一少女は『繩飛び』の回数を計算して毫も誤りあるを認めなかつた。又、他の八歳の少女は母から十一仙受取り、その内五仙を拂つて母の用を達し、残る六仙で半仙に十個宛の石玉百二十個を買ふに少しも計算を誤ることがなかつた。彼女が此の計算は頭腦のみを以て迅速に容易にしたのである。此の様な問題は算術の課題を與へて練習せしむるよりも遙に實際的であるといふことは論を俟たない明白なことである。斯かる眞の経験の外に子供は計算はどうしてすればよいかといふことを時々尋ねてそれを教へられんことを願ふことがある。此に於て初めて紙を以て其計算法を示し教授するのである。然れども彼等の要求以上に嘗て教へる事を強いたことはない。

彼等は次の様な方法から現代の歴史に耳を傾けるものが多い。彼等は日露戦争には多大の興味を有してゐた。又時には彼等自身が争闘を始めて戦争に擬することもあつ

た。以上の方法により古代の歴史を學ばしめる機會がないとも限らない。けれどもエフ夫人は古代史を教ふることは價值少なくて凡て忘却するばかりであることは知つてゐたけれども遂に思ふ所あつて此れを教ふることを確く主張した。而してその成績は豫想以上の善良な成績であつた、といつた。希臘、ラテン語及數學を教授するは最も困難なものであつた。教授は凡て歴史、地理、文學に於て彼女が嘗て何れかで學んだ而も普通の知識として興味あるものばかりに限定した。

見よ。此の學校が徒らに空しく時を遊ばしむるばかりでなかつたことを。

エフ夫人は又いふやう、

『彼等が行かうと欲したならば自分からよく地理の知識を得て來るであらう、(彼女は嘗て露西亞の喜劇を見聞しなかつたけれども同じ結果に出でた)』

『歴史は又彼等の日常生活に關係したものから始めなければならぬ。家畜、犬猫から始むるこそ最も有效である。』

エフ夫人は徒らに干渉を好む人ではない。若し子供等が安全な方法を以て乗馬せんとするならば之を制止すべきものであるとは思つてゐなかつた。若し彼等の行爲にしばしば干渉するやうな事があると子供は遂に自己の思考力に訴ふることなく全然その干渉を待たんとするやうになるのである。然れども彼等は自分のした事について多少の缺點あるを告白するであらうが此の時に於ても何等干渉がましい事を子供達の耳に入れることをしないのである。往々に學校の時間後愉快な音楽に耳惹かれて残る生徒がある。その靴は靴拭で拭ひ清め、諸道具は懇ろに原位置に返すことは何人の指導命令を待たずによくその便宜の道に出ることのあるのを見た。

子供等が未發の個性を發揮せしめんと常に其の精神を適當な方向にはたらかせてゐるのである。であるから彼等には沈着、忍耐の色もあり、又、能ふべくんば彼等自身の經驗から凡て適當な方法を學び出さうと勉めてゐる。

子供等に壓制を用ふるは遂に極惡な感化法と斷言しなければならぬ。子供に對して

壓制を加ふるは甚だ拙劣な教育法であるといふことは過去の經驗に依つて明かに證據立てられたのである。

彼の正義の觀念を勝手專斷なものとして威壓して、遂に統治せられたものとしての徒がある。それ或は生活の眞正な道に合したものであるならば彼は正に各自差別の位置を取らなければならぬ。若し奴隸と主人との世界を作るのであるならば之は最も適當な方法であるかも知れないが、自由の精神、自由の權化である人を作る道ではない、とはエフ夫人の主張であつた。又、彼女は牧師僧侶は人の品性或は慾望を變じさせる力を有してゐないことを説いた。彼等は犯罪者を減少せしむるの力なく、彼等は唯だ犯罪者を薄弱にし意志の力を破つて遂に卑劣の人となすに過ぎないのであるといつた。

此の學校にも一二の盜癖あるものゝ犯罪を見た。然れども幸に彼等の自重心を開發せしむることによつて之を矯正することを得た。此の方法で彼等に眞理正善を語らし

む可く底深い心から、納得せしむることを得た。

初めは彼に一時的後悔、落膽の色あるに過ぎないけれども遂には此の悪癖を根治し最後の成功を見るに到つた。之等の結果は従來の學說に比して教師の信用を失はしめんとする、けれども適當な境遇は社會の善良な一員を養成でき得るものと信するのである。亂暴時代の子供はなか／＼そんな事に考へが及びはしないだらう、と、人は難んずるだらう。若しそうであるとしたならば學校に來ない以前から常に此の様にあつたのではあるまいか。今は生徒の理性を開發するの外取るの策はないではないか。如何に不合理に似てゐるとも如何に困難であらうとも此方法を以て生徒を訓戒していただく感じさせる手段に出るの外はない。

世界には免れやうとして免れ得ぬ自然的懲罰の作用が行はれる。それを殊更に人意的に賞罰する必要が何故にあらう。何等其の必要を認めないのである。

抑々一の事を爲さんとするに當り訓育の甚だ困難なものがある。木片を要求し止ま

ないに於て、進まない容態を以て圖畫を初めやうとするに於て、心ならずも止む方なしに作文にかゝらんとする時などに於てである。すべきものと、してはならないものとを生徒の常識に訴へて訓戒するに多少の斟酌を用ふるは最も自然な訓育法であるといはなければならぬ。善良な訓育の法は唯生徒の有する自から戒むる心に訴へて教師の神々しい寸鐵人を泣かしむるやうな同情に富める言を以てするに限る。然るときはよく兒童を改悛に導くことを得るのである。無趣味な倦怠し易い學科も彼等に授くるならば將來の艱難に敵すべき強い抵抗力を養成する上に多大の價值あるは疑ふの餘地がないであらう。

エフ夫婦は殊更に教へなかつたけれども亂暴な子供も學校に來ての楽しい會合は端なくも相互に禮讓の心を起さすことを得た。教育と教へしもの（若し爾くいひ得べくんば）との間には兎角種々の感情の表れるのを見た。一日中に於ても課業終る以前聊かでも多少粗雑に近い取扱がないとすれば此は其の好例證として認められるのであ

る。嘗て二三の子供はエフ夫人が生徒の爲に何等の報酬を得ることなくして此の教育に盡力してゐることを見て不審さうに質問するのであつた。

『伯母さんは少しも月謝を取らないんだ。』といった。その子供はかなしくも前に盜癖、虚偽の病癖ある生徒であつた。

『伯母さんは月謝を取らないで、愛好を取る。』

概言すれば此の學校は寧ろ娛樂所といふに近く、子供自身に適切な經驗を積ましむるに最も適當な場所であつた。彼等の行爲は自由ではあるが反動、反省に満ちた自由、行爲の結果が善良な自由でなければならぬ。初期に於ける教化第一の目的は自我の發揮であつて多くの學校は此れを破壊せんとしつゝある。換言すれば行爲の最高善良に存する自由の自我を發揮する一線を意味する。道德的品性開發の最良方法を彼自身精神活動及若し、ありとすれば不良の性癖を絶對的に抑制して或一方面にばかり導くにあるとするならばその結果は常に生徒の意志を薄弱にならしめ何等新方面に發

展するの能力のないものを作り終るであらう。

彼等の精神を開發するの最も善良な方法は善良な時機に於て適當な休息を與ふるにある。而して彼等自身に次に起るものに就いて考へ出さすことは最も良策である。創造の能力はその練習のよろしきを得れば彼をして自由の人、獨立の紳士 することは決して難かしいことではない。生徒自からの力を以て考へ出させるといふことは教授法の秘訣である。

又、エフ氏は反問して吾人は人生問題及宇宙の謎等に對して能く解決を與ふることが出来るか。吾人の所説を以て子供にその問題の凡てを詳説することが出来るか。何故彼等をして自己の疑問に自から答ふる様に勵まさないか？ 吾人は男女の完全な發達を必要とする。なほ經驗から出達した發達を望むものであつて知識の詰込を以て満足する者ではない。満足する能はないのであるといひたい。

自我發揮といふのは他人の權利に對して自己の守るべき自由の謂である。即ち正義

と平等とを意味するのである。子供は之を経験上から修得しなければならぬ。それは性質の缺點を補はうとする最も有効な彼女の教育法であつた。平滑、規則詰めは學校の犯罪者を増さしむるばかりである。正義の養成に力あるの方法ではないのである。子供の意志を發達させるには自然の正義に對して力めて服従せしむるにある。一人の子供は不注意にも彼の杖を以て叩きながら遂に漆器を破壊した。彼の心痛もやうやく平和にかへつた二三日の後エフ夫人は彼に漆器の價格を説明したところ或者はその損害を辨償せしむべしといつた。夫れは或は當然で、彼の責を果させるには最も合理的であらう。彼はその損害を償はうとの決心で常に一仙二仙を悦んで貯へてをのを見た。

エフ夫人は面白いことを斷言した。其れは子供の半面だけを以て事を斷せんとすれば遂に誤謬に陥る。その根本的なるものは自由に考へること及秩序を亂す性質に因るものであるとした。此れ非獨斷說に似て實は獨斷說に陥れるものであつて疑はしい自由の精神はその意味することは極めて狹隘なものであるばかりでなく斯くては遂に偏狭であるといつてをる舊學派のそれよりも遙に此の說の劣つてをるものがあるといはなければならぬ。思想の自由は遂にメンヂスト派の教義に於ける様に爾く刻薄に子孫の思想に汚點を劃する主な力となるのである。此學校の精神は子供に眞の自由を得させやうと目的を標榜してをる。然れども思想の自由は又時に彼自身の特殊な哲學的懲罰を以てしても毫も後に害を及ぼさないことを主張してゐる人には素より類似共通の點が多い。であるから必ずやその幾部分かは同一の方法で教育せられ得る。此の學校が更に普通に進むならばその結果亦見るべきものあらんを信じて疑はない。

エフ夫婦は男子或は女子だけ區別して教育する事の誤りであるを信じてゐた。

『彼等は相互に連合してその完全な性質を得なければならぬ。故に子供等の全體の性質は了解せられ又説明せられ得るのである。であるから學校に於ては男女を共同に組織して以て相互の愛と興味とを有たしめなければならぬ。』と。

けれども家庭に於ける場合は如何にするか。何故子供を家庭から去らしめて教育するかといふに對してエフ夫婦は答へていふやう。子供の進歩は家庭以外に於てするを自然とする。といふのは家庭よりも更に大なる社會を希望するからである。何人も自己の経験した事實に徴しても知ることができると結んだ。

吾人は此の學校を如何に思考するか。余は某公立小學校長が風聞によつて此の學校の性質を聞知して之を非難したと聽いてをる。彼は曰ふやう、定まつた學級に於ける生徒を親しく個々に導くことは不可能なることである。生徒は勢力に服す、けれども此の個人教育に於ては勢力なるものゝあることはない。夫れ一個人を導く法としては正當に近いであらう。しかし數百の子供の入交つてをるのを導くの策とすることは出来ない。一騎を倒すことは左まで難かしくはない。けれども十二騎を一時に倒さうとするには自然の法に則り更に迅速に成果を得るの勢力を有たなければならぬであらう。思ふに此の學校の如きは小さい家庭に似せたものに過ぎない——或は家庭を擴

張せるのみ——そうしてその經營には無限の忍耐熱心及生徒を思ふの純愛とを要する。斯かる教師は世の中に極めて乏しく極少數の青年を選び得ることであつて稀有のことである。

猶私は此處彼處に於て斯かる非難の聲を事實上打破する經驗を見たいと希望してをる。私は此れは教育問題の解決に寄與することの大なるものがあるであらうと信じてをる。勿論それが決して究極の解決であるといふのではない、年を重ねるに従つてその見解を變じ更に多く知り、猶も深く且又凡ての困難を排除し得るやうな方法、主義でなければならぬ。

第十二章 家庭に於けるトルストイ

エフ氏と其の夫人とは子供を家庭に於て教育するを不可とする傾はあつたけれども、トルストイは其れと見解を異にしてゐた。伯が其の愛嬢愛兒に道徳的訓育を施し

た状況を語るは讀者に興味あることと思ふ。一八九四年、余がヤスナイア、ポリアナに翁を訪ねたところ、その時翁の家庭に同居せる瑞西生れの保母が居つて幼児幼女の教育を掌つてゐたのを見た。但し伯が保母を保母として認めなかつたことは之を信するに難くはないのである。伯の見るところでは保母を置くは贅澤であるとしてゐた。只其れが一個の人間であるから世に存すべき理由があるのであらう。であるから伯の家庭に保母の居つたのは伯が夫人の意に任せたことは殆ど明かなことである。トルストイは夫人に従順なるを主義とし何事にもその夫人の意に任せてゐたのであつた。(すつて結婚に於て其の一方は必ず絶対に従順でなければならぬとは善い考案ではあるまいか。して其の従順でなければならぬ一方は必ず良人であるとは誠に妙である。只我常規を逸せるばかりである。)

此の家庭女教師の來た理由は、ゼネバから來る嚴格なカルピン派が彼女が異教徒であるとして迫害したのをトルストイが日夜苦悶し彼女に同情したのに因るのである。

けれども彼女はトルストイの精神を知ることが出来なかつた。唯彼を聖人とするを首肯した。トルストイが果實を收穫するといふことにも反對はしなかつた。けれども補を化して無果樹とするの力はないか、彼は獨斷的教義の根本を絶対に分離しやうとして殊に補に多大の注意を拂つたことは明かである。

『トルストイは彼自から考へるよりも更によき基督信徒者である。』とは彼女が私に向つて低聲に語つたところである。彼女は單に基督教徒としてばかりではなく子供の保護に主力を盡さうとした。けれどもそれは遂に認められなかつた。假令其れが根本の考へとしては單純なやうではあるが、プレスビテリアン教派としては價值あるものとはいふことが出来ない。即ち家庭教師としての一大義務の上に立たなければならぬからである。人の子女に常に種々の知的質問に答へやうとするのは容易な業ではない。況んや自から相當の解決を與へない多くの疑問を有してをるに於ては尙更であるけれども彼女が珍らしい訪客に向つて眞實を語つた一事は神の意志に由らなければ、

らない。家庭教師としての重要な職責等に就いて種々實歴談を語つた。

私が此處を訪問する二三日前のことであつた。と彼女は先づ口を切つて小さい笹子（愛らしい健げな伯の令嬢であつて年は十歳である）と田舎から來た百姓の子と邸外の前方に遊んでゐた。彼等は例の争を始めた。一人の少年は怒の心堪え難いものがあつたらしく手にした杖を取り上げて彼女の腕を打つた。笹子は腕を強く打たれた爲に非常に泣き叫びながら邸内へ走つて來た。そして見苦しい青黒の肘を露しながら不平を訴へてゐた。彼女は決して父の顔色を讀まうとはせず父の下に走つて來て泣きの涙聲で戸外に出で行くやう願つた。けれども遂に許されなかつた。此に於て家庭教師はトルストイ伯が教育法を如何にその家庭に適用するかを觀察するの好機會を得た。それで彼女は之に向つて多大の注意を拂つて見て居た。

トルストイは彼の膝の上に靜かに子供を近づけ打傷を驗し涙を拭つてやつた。彼女は奥座敷に居たから話聲は辛うじて聞き取り得る程であつた、けれども彼の制裁の間

題について記述せられた多くの説をもつてすれば容易に想像することが出來た。

『どうしたかね笹子？』と、伯は口を切つた。

『子供を打ち返したければ私を打てば可いだらう。左うすればお前の腕の痛みが癒ほるかも知れない。』

『どうだ、其れが可いだらう？ ぶつぶつぶ。』

と意地悪く宣ふ。

『悪戯な子だねえお前打ち返してやらなければならぬだらう、ぶつぶつぶ。』

『いや一寸考へて御覽。笹子。何故子供がお前を打つたのか、お前に對して怒つたからなんだらう？ 左うでなくして子供が打つたかね？ 若し今私が彼を打つとすれば彼はお前より遙に苦痛を感じる、又、私が打たれても同じことではないか？ それよりは彼をして吾等を愛敬せしむるやうに此方から仕向けるのが得策のやうに思はれる。併し若し吾等が彼をして打たしむるやうにするとすれば彼は一生涯多くの

人を打ち傷けることであらう。』

此の時、笹子の泣聲も止んで聴えないやうになり、痛みも癒えた。そして今は抑え難い復讐の念も漸く平靜になるを得たやうに見えた。

『若し私がお前であつたら私はどうするかを教へてやらう。』
と伯は猶言を繼いで、

『昨日の夕食に残つた團子が戸棚にあるのを知つてゐるだらう。若し私がお前だつたらそのお團子を小さい皿に盛つてあの子供に與るだらうに。』

此の訓戒には笹子も大いに動かざるを得なかつた。笹子は遂にどんな舉動に出たであらうか。親愛な父の心を満足させるやうにしたであらう。又、恐らくは若し父の言葉の通りにすれば自分を打つたあの子供は如何なる舉動や態度を取るかを見やうとの好奇心もあつたであらう。蓋し此の教訓は彼女に對する慰藉に訴ふる暗示でもつたらしい。

彼女は遂に起つて戸棚の中の團子を取り出して敵である男の子に分ち與へた。

此の物語りに一つの弱點があつた。それは子供が残りの團子を皆食ひ盡したことである。

其年も過ぎ偶々彼は自分の伯母を毒殺したのである。犯罪者は即日十戒に因つて處罰せられた。刑罰學の大膽な經驗は此の立證に依つて破られたのである。けれども私は時に此の物語りを好む、必ずしも暴殺せられた事實に係らないのである。私には此の物語はベナス、デシロのやうに美しく感ぜられる。即ち、若しお團子を彼に喰した後に彼がころしたやうな事件例へば假令彼をして打つに價する憤怒を生じしめやうとするも更に穩に事を結んだであらうとも限らないと私は信ずる。

感化の最高目的は憎惡の念を轉變せしむるにあるのではないか。又、容赦及感情は此の結果に導くの至要なる手段であるが、團子は恰も愛の資本としての保證金となつたやうに罵詈、暴言を豫防し得た。して此の寛大な善い例の一面が如何に拙劣小膽、

區々小心な田舎の子供の憤怒と亂暴を制止したことであらう。

又笹子を打つた子供に就いて考へなければならぬ。彼の家はトルストイ伯の家と相接近してゐた併し近家といふ所ではなかつた。彼は間もなく伯の家に近い。笹子を打つたことについて伯に怒られれば直ちに逃げ出さうと豫想しながら進んで來たらば彼の遊び仲間である笹子は「お出で、おいで、宜いものを」と却つて微笑を放つてゐて彼女には更に涙はなかつた。そして善意を盡して皿に盛り今此に運ばれたのは一見美味な團子である。如何に團子は美味に見えてもそれに心奪はれることなく饒くまで堅く拒絶せんとしたのも束の間、何がさて彼の食慾は遂に之を制することの出来るやうには見えぬ、小さい百姓の子は毎日美しい團子の饗に預り得べくもない、今は羊の様に溫和にもち／＼と氣まり悪しく進み寄つて團子を一口に運んだのである。彼は皿を運ぶことに急がしく一語も發することもなく喜んで團子を嚙み込み頭を垂れてやう／＼視線を正した。遂に彼は小丘を這ふやうにして去つた。若し人に進化の

跡を止めて居るとしたならば彼は尾を振りながら去つたであらう。彼は遂に遊び仲間の小さい子供等と呼び集めて彼が再び人を打たないことをトルストイ伯の家族に眞心から誓はうとした。

彼の心は亂れ彼の行爲を醜惡に寧ろ愚鈍ならしめた心に拙劣な一勢力がある。愛と容赦は彼が解し得ざる美德であつた。若し彼に美はしい動機があつたならば——多くの子供が有してをる無邪氣な美はしい動機——其は必ずや團子と皿を見るや、却つて忽ちに怒りの火を放たしめないではおかなかつたであらう。

私は多くの人が私の見解と一致しないことを知つてをる。嘗て私がニュー、ジャーシーの公會で此の物語りをしたことがあつた。その夜公衆の一人は會釋して演説の後稍々質問するところがあつた。それは食物を以て人を誘ふことの反對論であつて可なり長時間を要した。彼は氣高い親切な白髯の老紳士であつた。談話室の一角に立つていふやう、

『私はあの子供のしやうとしたことを知つてをる。』

『其れはどんなこと？』と私は尋ねた。

『彼は次の日再び来て他の腕を以て笹子を打つであらう。』

此の間、老紳士はその理由を説明したか否やを記憶して居ない。けれどもこれについて二つの説のあることを見た。一はニュー、ジャーシーの此の老紳士と他は露西亞の老紳士トルストイの説即ち此の二つである。而も此に於てこれを見るに人生の行爲について論議しなければならぬ問題の横はつてゐるのを見るのである。二者共に人生の如何なるものなるかに就いて更に深く觀察を要するのである。團子と杖、容赦か責罰か、復讐と愛と、其の何れが果して善美な結果を運ぶか!! 此の事件中に眞なる美の要素が一つある。眞に反する美の要素が果して成立するか否かといふことである。而して若しそれが露西亞の見解に於て眞であるとするも吾人の日常生活に示して普通に適用しなければならぬ眞であるとする事は出来ぬであらう。此れ教育者の熟慮

しなければならないところではあるまいか。

此の團子物語に對してイリノーキスにある私の友人から來た書簡を以てその宗教的逸話を示して此の章を結ぼう。

『貴下に御知らせ申上たきは小生の一男法藏ホハイに關する經驗に御座候。子供は七歳、彼は決して喧嘩を好まず、甚だ親切の心に富み平静を好む溫和の少年なること御承知被下度候。然るところ此の夏一日學校より甚だ不安の顔を以て歸宅仕候。丁度その時某家近街へ轉宿せる時に有之、その子供(法藏位の年齢に候)は意地悪くも法藏に石を投げたることに候。小生の地主の娘、當時四歳、この話を聴きこみ、大いに怒り、その粗暴を攻撃致し候て大いに法藏に同情を寄せて彼女は注意と保護とを捧げて法藏を安全に通學せしめんとまで致し候。併し小生は此の機會を利用して基督の人格を適切に俾ばしむるに最も好都合なりと存じ、貴下の御説明の如くトルストイ伯の經驗など想起致候。則ち小生は子供を諭して直ちに石を投げし子供の宅まで

伴ひ、恰も今到來せし新鮮なる數個の桃を與ふるやう命じ候處子供は直ちに例の少年に與へ申候。彼は間もなく美しき一つを掴んで逃げ申候。小生は一街横なる木陰に佇み少年の行動に就いて私かに覗くが如くに注視致居候處桃は凡て受領せられ候。敵は至廉なる物品を以て征服し得たりと申し得べき次第に御座候。小生切に考へ候は法藏の心に宿せし愛の力の今更偉大なるを感せしことに有之、目下は彼に何等の敵もなく、守護するの必要も無之様相成一同欣喜致居候。』

第十二章 刑罰學

前章兒童道德教育に於ける研究中刑罰てふ語を用ふることの甚だ適切なることを感じた。なほ刑罰學と教育學との密接な關係を説いて比喻及例證を引用したことは一再ではなかつた。偶々頑固な子供によつて提供せられた教育問題を攻究せんと最後の二三頁を之が爲に費したけれども決して主題を離れて徒らに横道に入つたといふほどでもないのである。

トルストイは刑罰の如何なる形式であるに論なく、人間の上に人の力を以て處罰する理由はないとして、犯罪者を入獄せしむることは凡て之を非難した。此の説は甚だ極端に類して、善良なる犯罪人は能く自から刑罰し得るといふ結論の奇觀を呈すであらう。二十年同北米合衆國監獄局長であつたチャルトン、チイ、レウキス氏は千九百〇三年ルイスビルに於ける内國監獄會議に彼の説を講演していふやう、

『我國に於て經營する獄舎は到るところに存在する。これは犯罪養成の學校である。若し多くの人が自己の職業を永續せしむるに之を破壊せんとするならば世の社會的科學は益々此の方面に於て光を加ふるであらう。』

經驗に由つて未丁年者の犯罪を考案すると恐るべき犯罪者製造の結果を示した。自由は處罰と相容れない。それは人生自然の状態である。彼等を十分に效力ある矯正の實績を上げ得るのは唯感化の一條件があるだけである。』

内國監獄議會での彼の演説の速記はユール大學法政雜誌(Yale Law Journal)で千八百九十九年十月に掲載せられてハートホールドから出版せられた。その一節に次の如きことを説いてあつた。

『獄中生活は最も不自然である。人は社交的動物ではないか。禁錮は彼の高潔、責任の意識をして益々鈍らせ、又人生の進歩に必要な彼の動機を薄弱にし、彼の品性の基礎を害すること甚しい。且彼の獨立的生活の精神を損ふことも亦大なるものがある。』

犯罪者に一人の看守を添へ、戸籍面に犯罪を特記するのは最も普通の手段である。斯くして犯罪者は生涯犯罪に犯罪を重ねるのみである。

此れは私の經驗によつて斷言するところであつて二十年間の實驗は犯罪入獄者の十中九以上は此の範圍を出でないものであるといふことを確信した。私は之を公言するに何等憚るところはない。』

レウキス氏は「未決宣告文」に對して極力辯護の地位に立つて適當な監視の下に犯人を自由無罪の人とせんとする。斯くして無罪となつたものは再び社會の秩序を亂さないであらうと。更に説いて曰ふには、

『一般に此の方針を取る。けれども墮落の甚しいものに對しては如何にして斯く法律に違反するやうになつたか、彼の社會的動機は當に覺醒し責任の觀念を自から勵まさなければならぬ。然るに今斯くの如き状態にある。而して他の法官の意見をも徴して人物の評価をする。一に人としての同情を以て正しい行爲に導かうとする。此れ人衆の社會的生活に處するの適當な方法ではあるまいか。』

千九百〇三年パツフワローに開かれた第四紐育州慈善協會委員の「社會的職業の保護」に關する報告はレウキスの犯罪者處罰の理由に於けるやうに甚だ重要な報告であつた。同會の委員であるヂエー、ジー、フキエツプ、ストークス氏は同じくルイスピルの内國監獄議會に於て次のやうな演説をした。

『第二十回例年の内國監獄議會は今ルイスビルに開かれる。ケンタツキーの會合に於ては百名以上の監獄官吏は米國及加奈陀の刑法協會を代表して出席し、又多くの刑罰學者、刑法學者、その他社會運動に熱心な學者を併せた。開期は五日で終つたが演説者の持説に對して何等反對の聲はなかつた。即ち監獄署は犯罪の主要根原の禍中にある、而も監獄署は彼等を矯正しないばかりか反つて更に犯罪を増加せしむるものであるといつた。十分な能力と經驗とによつてその主張を固守し有力な證據及其の理由を説明して裁決の破棄不服よりも更に有害也と認むべき社會及犯罪人に對する監獄の重大な感化の責任に就いて議せられた。』

監獄署の組織の狀態が正に以上に記した如きものであるならば、

『寧ろ何故に監獄を廢しないか？』

の問題は自然に提出せられなければなるまい。トルストイは此のやうに深く想到はしなかつた。彼は此れを廢すべきものとはしなかつた。であるから彼は曰ふ、

『私は人民を抑制しなければならぬ理由があるとは信じない。でその直接であらうと間接であらうとに論なく私は斷じて彼等を監獄に投じ重い刑に處分しようとはしない。彼の初めて犯した罪惡を以て彼の刑を定むるを止めなければならぬ。何人でも、よく神の裁決を下し得るものはない。凡ての人は次第に我が説に讚成して來るであらう。刑罰執行人、看守或は守衛は自然に減少しなければならぬ。又、斯かる職業は遂に社會から撲滅せしめなければならぬ。』

而して此廢止は事實として社會の此處彼處に行はれつゝあるのを見るのである。死刑執行人は虚偽の矯正によつて刑罰の眞の意義を知る。斬頭人の職務は常に社會の嫌惡を受ける。これ電氣學者が電氣を使用すると少しもその間に區別のない筈である。其の然らざる所以は實に人を殺すことを惡むからである。數年前加奈陀に監獄署設置のことがあつた時、官吏等はその附近に絞首臺設立を請負ふ大工のなかつたことを報告した。遂に稍々遠方の町に此の勞働に當る職工のあるのを發見して請負契約を結ん

でその地に設立することとした。之に護衛の兵士を附け、その竣工を急がしめるためには時には空砲を彼等に擬せんとしたけれども世に死刑のないやうにといふことを希ふて遂にその工事は成らなかつたといふことである。

モウバツサンは彼の著『水の上』*Sur l'Eau*の一書中モナコに於て死刑を宣告せられた——一暗殺者に關する興味ある物語を記した。何人も彼をして死刑を説くものはない。佛國政府は其の裁判所に對してこのやうな誤つた犯罪を宣告せしめたのであつた。判決文は必然に犯罪者の生命を奪ふことに一致した。けれども間もなく流刑にせんとの議論が起つたがかくては犯罪者が脱走し服役を拒むやうなことがあつてはと憂ふるものがあつて、遂に彼を佛蘭西の國境以外に住居させることとして無期徒刑に處するやう衆議が一致した。モウバツサンは之を歴史的事實としてこの記事を作つた。而も此の關係によつて彼の文學的着想の上に如何に多くその着想上損をしたか知れないのである。

更に此の點について千九百〇三年に死んだ米國のニュー、ジャーシ州カムデンのシエリフ、ミネスの場合を見るならば、當時の新聞紙は論鋒を鋭くして刑罰の死刑は彼の生命を奪ふに當然の結果であると論じた。犯罪者は殺されることを豫期して恐怖の色はあつたけれども自から平然自若の風を装ふて勇氣を鼓舞した。

あはや彼の一命は風前の燈のやうに、彼の健康は甚だ衰弱して今や生命の糸は寂しく消えなるとした。けれども彼の心には何等死刑のことを考へず、即ち生死の境界に一喝を與へられて遂に倒れた。斯くて自家に引取られ一二週間墓のない露葉の命をつないで遂に死んだ。醫師は呼んでいふ。

『苦悶によつて著しい不消化の病狀を來たした。』と。けれども彼の死因を診察して『彼の精神に關する貴い適當な境遇を激變して狂亂せしめたのに因る。』とした方が遙に當つたのではなからうか。若しミネスが彼の行爲の結果を豫知し得たならば彼は死刑の宣告を受ける前に遁走したであらう。人の想像以外な寸隙に乗じてよく脱走した

であらう。そして彼の死刑は斯くして當然廢止されたであらう。

トルストイの未だ若かつた時巴里の絞首臺に於て死刑に處せられた事を知るや最重刑に就いて世の注意を喚起せんとした。彼は之によつて本能的に極惡の仕業であるとして單なる極惡の刑罰のみだと感じた。一人が他の一人を殺すてふ單純な事實がある。國家は死刑を罰則として制定したといふけれども人を殺すことは出來まい。とは人のよくいふところである。

吾人は吾等の個人的行爲を斯くの如き方法を以てしては到底責任を帯びて遠ざけることは出來まい。然らば最高刑罰は如何に制せられなければならないか。生命は何れの國家でも安全でなければならぬ。此の精神は遂に永久の眞理でなくてはならぬ。

故マツキンレー大統領の暗殺者の行動について注意して見よ。彼は死刑を廢止した十五以上の諸州を漫遊した。彼が遭難一週間以前、三十年以來死刑を廢止した彼のミシガン州に數日滞在した。暗殺者ザルゴツツは力めてマツキンレーの定宿所附近に居

をトし彈丸の準備も既に成り、マツキンレーの生命を奪ふ凡ての手段が整つた。それから暗殺者は如何にしたか。彼は暗殺によつて當然受けなければならない死刑の法規ある州まで大統領が行くのを待つたではないか。而して死刑を廢せざる地に大統領が到つた時豫て企圖した暗殺を執行した。若死刑に何等かの效力があつたとしたならばそれは犯罪を急がしめたに過ぎない。遂に彼の生命は悲惨な光景を呈し、加害所を選ばせたる一事は實に死刑を惡むの情を最も痛快に現したではないか。けれども此の事實は犯罪の制裁に關する觀念の乏しいことを示してはゐはしまいか。即ち犯罪的行爲ばかりに眩惑して刑罰することに依つて自からの手を咬まれ、犯罪を除かうとして益々増加せしめつゝあるかの觀がある。

死刑の弊害は右のものばかりではない。其の社會の風教を害することは多大なものである。然るに現状を見るに於て、その光景を新聞の記事に於て讀むに於て、或は現場附近の住民が之を目撃するに於て如何に社會の風俗を害することの多きかを思はな

ければならぬ。此事に就いては『牢獄に於ける歌謠』の一節を試みに読んで見れば明瞭である。その監獄の歌であるすべてが犯罪者一般の傾向を示してをる。アヂロンダツクの無人島に移すべし。ダンネモラに於ける小さい監獄署内の絞首臺は凡て他へ移轉させるやう數年前の議會に請願した所、その筋の官吏は之をして至當であると認め許可せんとした。此とき州は死刑執行所を深い森林の中にてさせやうとしたとか。吾等は此の汚らしい所業を遂に社會から驅逐しなければならぬとの主張を高唱して止まなかつたのである。

犯罪者を精密に觀察するときは常に彼等の精神にも多少の善意な心理的原因のあることを見ることが出来る。私は此の事實に就いて一二年前ジョーヂアのことを思ふて更に此の感を強うしたのである。

私はアトランタの新監獄から彼が當るべからざる勇氣を出して脱走したことを知た。此の時内地電報は各地に彼の逃走を傳へ彼の危険を辭せざる品性が此に出たことを説明した。

監獄に於ては彼が有して居る『危険を省みない品性。』に適應した處置に出たのか。彼の職業は理髮業であつて終日華客の咽喉の附近に鋭利な剃刀を振り廻すに最も慣れしめたのである。彼は此の範圍に於て甚だ忠實であつた。——而して此の程度を越えやうとしたのではあるまいか——而かも彼は自分は無罪の位置にあるに十分であると信じてゐた。此の物語は刑罰學に於ける好箇の一問題たるに近いではなからうか。それは吾等に法律的威迫の手を以てするよりも人の好意を以て彼を遇することの遙に安全であるを吾等に教へたのである。又、世の所謂凶漢であつても親切心を以て社會の秩序を保たんとしてゐることを示してゐるものではなからうか。

監獄吏に就いて見るに彼等は互に多少その意見を異にしてゐる。慈悲同情の念に富む獄夫に質問すると、彼の答へは犯罪者の精神を汲んで見るに罪惡の心を以て充たされてゐるといふのではない様である。一罪を犯せば直ちに刑罰を豫想してゐるやうで

あると、深く穢悔の色を表して居る彼を罰するは寧ろ酷に類するではあるまいか。養育院は彼等に適當な場所ではあるまいか。犯罪者の凡ては寔に吾等を受すると告げるであらう。若し監獄はすべて無益の經營であるとするならば彼の狹隘な監獄社會を廢して實社會に甚だ近い所に犯罪者の同胞を置く方が可いであらう。夫れ凡ての人類は假初めにも善惡を以て峻別すべきものではない。凡ての個人は半面は善であつて又その半面は惡であると見なければなるまい。そうして教化の最良法は罪人の人格よりも高尚な聖人の手によつて懲罰するを策としなければならぬ。此に於て只自制の一途があるばかりである。教育は社會の安寧を目的として更に價値のある方向に誘はんとするのである。その力は到底監獄の企て及ばないところである。

斯のやうに觀て來れば寧ろ監獄は世の中に無い方がよろしいことがわかるであらう。一萬以上の殺人者は毎年米國監獄に投せられる。併しよく犯罪者を制裁し得たものは十人に一人も覺束ないことであらう。九人までは借すに長い年月を以てしても猶

制裁し得られないのである。それでも尙此の事實は恐るゝに足らないといふのか。更に尋ねて見様ならば來年殺人罪として獄に投せられる者であつても今日は未だ自由の身ではないか。殺人者は時の到るを待つて次の年に決行するであらう。之を豫防する策はないであらうか。斯くても尙吾等の生活は平靜であるとして太平樂を奏し得やうか。法の力には何等吾人が信頼すべき分子はないといふことを知らねばならぬ。只據るべきものは人生の善良な意志があるばかりである。

法律は吾等と犯罪者の間に立つて何を爲すであらうか。徒らに加害者を獄に投ずるを以て能事とするに過ぎない。獄舎生活をしてその終りまで服役を全うする者は甚だ稀である。吾等は刑罰を目して一時的の制裁であるとするのも亦故なき事ではあるまい。獄舎の中には敢て『危険を辭さない性格』を有するもので充たされ、之に五年乃至十年も趣味のない厭ふべき生活状態の下に繋ぎ、然る後彼を放免せんとする。此れはレウキス氏の所謂『そは恰も人を喰ふ猛き虎を一ヶ月或は二ヶ月又は一ヶ年監に飼

ふて之を放してやるに齊しい』といったのに似てゐる。必ずや彼は彼の出獄後は入獄以前よりも更に極悪な無情を遺憾なく養成せられたであらう。又彼は今獄中で獄に投せられた以前よりも『更に生命を顧り見ない』最も危険な品性を作られたといふことは疑ふまでもないことである。このやうな政治制度を指して社會を保護する位置にあるものであると思考し得るであらうか？

吾人の刑法には只一つの正しい目的がある。更に善良な人とせんとする之が其目的である。犯罪は愛の缺乏する結果である。必ずしも病的であるとは断定し難い。改悛せしめやうとする眞の境界に導いて以て人性に於ける愛の光を鋭敏にするにある。然るに監獄吏は此目的を遺憾なく達して居るであらうか。最重刑罰は吾人の此義務を没却せしむること既に明かである。吾々はどんな權利を有つてゐるかを先づ考へなければならぬ。今沖の島に一個の監獄を造ると假定して考へて見れば人民の意向を無視して之に罪人を投じ得るか如何であらう。入院してゐる最も危険な患者の舉動を和らげ

止めやうとする看護法、或は病者の種々な要求を適當に満す看護の秘訣は、正に刑罰學の好資料であつて必ず此の進歩した感化法に因つて治療しなければなるまい。何人も極悪の生を送らんとするものはないであらう。見よ彼を入獄させる前には彼にも多少の善美の行爲を認め得られたであらう!!

吾人は何うしても政府の刑法の價値を信することはできない、——命令によつて支配せられる社會を表示するの必要はない、——人民の責任ある行爲は絞首、禁獄、威迫、恐嚇によらないで寧ろ人間自然の親切、同情の念によつて動くものであるといふことを吾人は知ることが出来るのである。之は唯に安全な方法であるばかりでなく又萬人をして幸福に導く呼吸であるといはねばならぬ。

犯罪及制裁に關して科學的に且博愛の精神を汲んで誤りのない意見を立てることは甚だ困難であつて亦極めて遠いことであらう。

パーマフの制裁は一見犯罪の辨償であるかのやうである。であるから犯罪者が至當

の辨償を完了すれば彼は新しい人となつて社會に出ることが出来るといふのであつた。彼の著書は人類の平等でふ立脚地に立つて刑罰を論じたものであつて此の點は他の刑法學者中一大光彩を放つたものといはなければならぬ。(フキードリングス氏の好著「人民の精神」を参考すべし) 刑罰よりも制裁することは甚だ困難であるといふ最奇なる結論に導かれねばなるまい。犯罪者の多くは祖先の犯罪的傾向を稟けた一種の遺傳である。若し絞首に處すとしたならば管に殺すその一人だけを壓服したに過ぎない道理ではあるまいか。

犯罪そのものよりも改悛の要素を求めることは得られるであらう。エドワード、カーペンターはその痛快な一論文中に説明して、不完全な現社會は往々人をして醜行を犯させる場合があると説いて居る。密輸出入の如きは不自然な商業に對する束縛に對して起る反動的事實として必ずしも罪の深い醜行であるとは斷じ難いものであらう。往々平凡な市民よりも却つて高尚な道徳的方面に於て一大問題を提出せられることが

あるのである。

最大罪惡は時としては最大道徳となるやうな如き場合がないとも限るまい。賣國不忠の行爲は犯罪中最重いものであらう。併し義務を完了した者であることもある。裁判所の白洲に立つ人の中には社會進歩の一大恩人のあるを認めざるを得まい。十字架に釘づけにした繪畫は正義の一大反抗者として佛蘭西の各裁判所に懸けたところであつた。近年政府は命令して之を他に移させた。けれども之は正しい處置ではない。その過失及制限しなければならぬ白洲に於て想起せられるものは此の一面の繪にも及ぶものはないであらう。歴史上の善い大きな犯罪者の繪畫を掲げて牢獄を飾れ、彼の顔には法律の強迫に對しても猶謙遜の色があるであらう。此れを見ても犯罪者は遂に何物かの刺激を受けずにはすまないであらう。

又普通の犯罪者に於ても犯罪に徳の光を認むることが出来るであらう。再びレウキス氏の示した明白な立證を引用するならば彼は罪の、立證に關して説いていふやう

『地球の表面に躍出してゐる英雄に注意するならば、余は人類の公平な眼から判じて彼に上位を與へ、その崇高な人格の前に服せずにはをられない。我生活は毫も斯かる英雄的事業ではない。であるのに彼は社會からその地位名望を呪はれ憎惡刑罰を一身に集めて恐るべき苦難を負ふた、けれども彼は遂に自我に克つた。凡ての苦悶を平定し、彼を目して不信の徒と輕蔑した人民の謬見にも打勝つて見事戰捷の効果を全うしたのである。』

未決宣文及尋問立證の形式はレウキス氏のやうな人の手を煩はして初めて眞正な宣告判決を下し得られることは明かである。彼の宣告は未だ爾く明晰に判定せられない程に驚くべき成功を示すものがあらう。犯罪者は恰も兒童に似てをる。社會に於て教化はなければならぬものである。現實の人生から斷然別天地を形成するやうな學校の能くすべきところではない。

一般の犯罪者は刑舎、義勇兵、救世軍等の社會に依つて之を支配しなければならぬ

い。けれども社會自身も犯罪に對して大きな責任を有たなければならぬ。吾人は行爲の社會的關係を忘れ易い。吾人は社會の一員である失行者も沈黙者も凡て此れ皆社會の一員である事を知らねばならぬ。且凡ての犯罪起訴は所謂「ジョン、ドレイ」に對する人民」であると同時に人民に對する「ジョン、ドレイ」であることを知らなければならぬ。人民に於て原告の被害を認め、或は全く彼を許すに決しても凡て登録するの必要はある。その證據としては不正な社會的狀態に依ること、適當な境遇、好機會の制限及教育上の缺點などは重大な原因として先づ擧げられねばならぬ。

『犯罪の心理を考察するものは先づ犯罪の性質如何を考究しなければならぬ。時代を追ふて吾等の社會組織は常に犯罪者の製造に力めつゝあることを知らなければならぬ。』と説いたレキウス氏は種々な實例を引用した。軽い犯罪者を入獄せしむるは極惡の結果を生ず。此れは凡ての方面から攻撃するも常に眞理として知られるのである。微罪不檢學を唱へたのである。

吾人は現代の社會に處するには正義を持たなければならぬ。そうして吾人が『正義の實行者』として適宜なる以前に實業の組織がなければならぬ。又、吾等はその子弟に善良な發芽の發達を見たならば之に教育を施さなければならぬ。若し一たびその惡の傾向を許すやうなことがあれば早晚彼をして犯罪者として適當なる候補者とならしむることは明かなことである。

教育家としてのトルストイ伯 終

附錄 教育改造論

西山 哲治

一、教育改造問題

デモクラシーの思想が傳つて來てから我國に於ても各方面に於て解放又は改造論が唱へられるやうになつた。或は國家の組織を改造せよと主張するものもあり、政治上の改造として普通選舉の運動も始まる。家庭の改造より婦人の解放を叫ぶものもある。勞働者の時間と勞銀の値上を運動するものもあり、社會一般の改造を促進するものもあり、店員の定休日と與ふるものもあり、思想上に於ても亦積年の主張とは大いに趣を異にして來たやうである。要するに一般多數の利益といふことから打算して凡てのことを改造しやうといふに一致してゐるのである。民衆の利益を保護するために一般弱者に

同情味方した精神を以て政治をしやうといふ趨勢になつたのである。

國家、社會凡ての改造を絶叫せるときに際し獨り教育界のみ超然として此の大きな思潮の流れに動かされないといふ道理はないのである。果して然らば今後の教育は如何に改造さるべきであらうか。以下少しく國民教育の改造について指を染めなくてはならないと思はるゝ點を研究して見たい。

一、デモクラシーは教育改造の聲也

デモクラシーといふ言葉は今や一種の流行語となつて政治界、宗教界、文藝界、教育界、思想界、社會一般に風靡して來たのであるが、これは單に我國ばかりではなく、世界の大きな思潮の一つとなつたかのやうに思はれるのである。

リンカーンのいつた、Government of the people, by the people, and for the people. といふ一語は誠によくデモクラシーの意味を現し得たものである。今これを教育上に

導くならば Education of the pupil, by the pupil, and for the pupil. となる次第で今迄のやうな教師本位主義の教育を捨て、生徒本位の教育、學生本位の教育としなければならぬことゝなるではないか。

教育、教授の上にデモクラシーの精神を汲み入れるならば従來の如き教師の便宜、教師の都合、教師の獨斷、専横な教育法は大いに之を改め、その代りに學生の便宜とか生徒の都合を大いに考へてやらねばならぬことゝなるのである。故に彼の學校騒動の如きはデモクラシーの精神を以て教育し、此の精神にて學校を經營すれば決して起つて來ない筈のものではあるまいか。

若し夫れ學校教育及學校經營がデモクラシーの精神を持つならば行詰つた教育といはるゝそれが大いに刺激されて面目を一新することゝなるであらう。

例へば試験をするにも教師が採點に便利なやうな問題の出し方はなくならねばならぬ。即ち學生生徒の實力養成となるやうな問題を選択して提出するやうになるであら

う、その結果として採点上教師が大いに骨折らねばならなくなる、それはデモクラシーの思想のために、多数の生徒の眞の利益のために教師たるものは敢て之を忍ばねばならないであらう。

教授法に於ても従來の如き教師本位主義のやり方は改めねばならぬこととなるのである。例へば注入主義を取り、講話式、説明式をのみ取るときは自然と教師の獨斷的、説明的教授を生徒は只見てゐるといふに止まり、何等自學自習といふ學習的活動が之に伴はず、従つて生徒の實力はあまりつかないのである。教師は只一人で十人前もしやべるといふのみで、少しも生徒をして言はしめ、生徒をして考へしめ、生徒をして爲さしめざるやうな教育は捨てられねばならぬ。要するにデモクラシーの精神を教授上に適用すれば學生生徒本位の自學自習的學習法とならねばならぬ。教授法は規定の教材を生徒に傳達し終ればそれで教授の目的と任務は達せられたものとは見ることが出来まい。必ずや、生徒の實力を養成するといふ一事を唯一の目的とせねばなる

まい。

道徳上よりデモクラシーを見れば民意尊重、弱者の人格を認むるといふことになるであらう。従來の強者本位から一轉して却て弱者本位に向はしめんとするものである。弱者の人格を認めるといふ點を強く主張して來るのであるから親子の關係に於ても、師弟の關係についても、雇主對被雇人の關係についても従來は親、教師、雇主の強者本位で子、生徒、雇人等の弱者については第二第三に考へられ時には弱者の人格をさへ認められなかつたのである。

斯くの如き強者本位の横暴な專斷的道徳はデモクラシーのために改められなくてはなるまい。

親も子供の立脚地を考へて教養してやらねばならぬ。大人本位、親本位の家庭生活をして少しは子供本位に同情した家庭生活を営ましめ、大いに子供の衣食住の生活について考へてやらねばならぬこととなるであらう。

師弟の關係も亦親子の關係のそのやうに大いに生徒の立場に同情し、生徒の人格を認め、生徒本位の教育、生徒本位の訓練教授に向つて進まねばなるまい。

女中とか下男等は昔から主従關係といつて、主人の命令には絶對的に服従して來たものであるが、それも今日では餘程變つて來たのである。給金制度による單なる雇傭契約の關係となつて來たのである。米國に於ける女中の如きは日本の女中に比すれば遙かに勤務時間と給料とに於て自由と優遇とを與へてゐるのである。若し、デモクラシーの精神を以てすれば家庭に於ける下女、下男の關係や待遇にも大いに影響を及ぼすものと見なければなるまい。勞働者、使用人、雇人等の雇主との間に於ける關係も亦大いに變化せざるを得なくなるであらう。

學校の職員間にデモクラシーの空氣、氣分が浸入して來れば從來の如き部下に對する校長の專政的、獨斷的、命令的態度は大いに慎まねばならぬこととなるであらう。校長が部下の教員を統御するなどいふ言葉はデモクラチックに響かないではないか

校長に部下の教員や生徒が盲従するといふやうなことも誠に穩當なことゝはいはれないであらう。

學校は校長及教員が一致協力して共に經營の衝に當るべきで、決して校長の命に從ふのみを以て部下の教員の任務又は心掛としてはなるまい。又、校長も部下の教員に對して高壓的に命令を下し、使役するといふやうな專政的な考へや態度は改めなくてはなるまい。

校長本位の學校經營は面目を改めて、今後は職員の協議によつて經營方針を定め、協力一致して努力せねばならぬ。部下の教員を弱者と見て之に十分の同情を寄せ、彼等の權利を十分に認めることによつてのみ職員（校長を含むこと勿論である）の協議協力、努力が見られ得るのである。デモクラシーの精神を體し、校長が部下の教員及生徒、又、教員が生徒に對する態度を改むるならば此に彼の學校運動を絶滅せしめ得るであらう。又、校長教員間の意志が十分疏通して教員間の反目、軋轢等、なくなるであら

う。斯くすることによつてのみ學校内外の眞の平和は得られやうといふ寸法である。要するに弱者の人格を認め、相率ゐて自由と平等の生活に近づかんとする此の新しき思想は決して危険視すべきものではなく、却て之をよく利用し以て教育改造の導火線としたいものである。

三、社會をして眞に教育を尊重せしめよ

教育を根本的に改造するには國家及社會をして眞に教育を尊重せしめねばならぬ。國民が一般にもつと教育を重く見るやうにならなくてはならぬ。

教育を尊重する國家は榮え、教育を重要視しない國家は自滅するの外はないのである。

戰爭をするにしても今後は國民と國民との戰となるのである。換言すれば國民教育と國民教育との戰爭になつて來るのである。國民教育の充實した方の國家が勝利を博

するに相違ないのである。

國家は教育を視るに陸海軍以上に尊重してゐるであらうが。三十年國民教育に盡瘁した功勞として勳八等を授くるのは如何、一兵卒が二三年間國家に報いた功勞のそれと相等しいといふが如きは確かに國家として教育を尊重しない何よりの證據ではあるまいか。素より教育者は國家より位記勳章を受くるが如きことを念とはしてゐないであらう。けれども、國家が教育者の功勞を表彰するといふには他の社會の人々の功勞と比較して公平にしたいものである。三十年一意教育の事に盡した功勞者ならば勳二等或は正三位功何級位は寧ろ當然ではあるまいか。國家が此の位の程度まで教育を重要視するの實を示してほしいものである。

最大切なる國民教育に於て學校が不足であり、經費が十分でないとか、教員が不足であるとかの理由の下に現に東京市に於て盛んに不完全なる二部教授(半日教育)といふ内職的教育を行つてゐるが如きはこれ亦確かに教育尊重といふ精神に悖るところの

一大事實ではあるまいか。此等も若し一般國民に教育尊重の念があれば輿論に訴へても二部教授の撤廢を實現すべきであらう。

中等教員の年功加俸の制が纏らなかつたり、或は義務教育費國庫補助案が議會で否決の運命に會ふやうな社會状態では未だ教育尊重の域に達するには遠いことであるといはねばならぬ。

所謂成金輩の如きが一夜に數千萬金を浪費し、劣等なる遊樂に幾萬金を投ずるものはあつても教育のために巨額を寄附するといふのはほんの數へるばかりである。

社會の人々も亦教育に對しては口では大切なことであるといひながら、熱心に眞面目に教育のために盡すといふ人は甚だ少ないのである。教員に對して動もすれば輕薄の眼を以て視るが如き社會に於ては到底教育の根本的改造は望むべからざる次第である。

要するに國家も社會も國民も一體にもつともつと教育を眞面目に考へ、援助し、尊

重し、教育者を重く視るといふやうにならなくては教育の改造は出來ないのである。教育改造は國民總が、りで我國民總動員によつて行はるゝものである。故に教育改造の背景としてはどうしても一般國民の教育思想を改造して行くことが第一に肝要であらう。此の點は大いに通俗教育として新聞、雜誌、活動寫眞等に於て教育尊重の宣傳をしてほしいものである。

四、成金道徳を涵養せよ

所謂成金者流には自分の力で自分が富を作つたのであるから自分が勝手に自分の欲するまゝに使つても誰も文句はあるまじき筈であると主張するものが多い。此利己的の主張も一理あるかのやうであるが、併しよくよく考へて見るとそれは到底許容し難いものである。

自分の力ばかりで儲けたと成金者は心得て居るけれども、抑々それが大なる間違の

基である。自分一人で儲けたといふけれども實は大勢の人々のお蔭で儲けさせて貰つたことを忘れてゐるのである。世の中は一人では渡つて行くことは出来ない。兎角世の中は相持である。此の多數の儲けさせて貰つた人々の恩を忘れてはならぬ。直接的に犠牲となつた人は少數であらうが間接的に犠牲になつた人は數へきれない程多いといふことを考へねばならぬ。

成金は自分の手一つで儲けたといふが、電信、電話がなかつたら果して彼の取つた方法を以て儲け得たであらうか。彼が成金となりし助力者には郵便局員あり、電話局員、交換手、電報配達人もあつたであらう。又、鐵道、電車、自動車の便によつて物貨や信書や人物を運搬して富を成さしめし點より見れば鐵道員以下の吏員、驛長、驛夫、車掌、運轉手、船長、水夫の力による貢献をも考量せねばなるまい。又、新聞雑誌の廣告を利用し、或はその報導の材料により、或は物價表の知識によつて富を作つたとすれば新聞、雑誌社、記者、編輯者の力をも大いに感謝せねばなるまい。

彼の身體と財産とを安全に保つやうに保證して呉れた國家に對しても彼は甚大の感謝を表せねばなるまい。

彼に資本を供し、彼を信用して取引をなし、生活品を供給して凡ての雇人、彼と契約して彼と事業を共にした人々はこれ皆彼が成金となるに助力した直接關係の大恩人である。

一成金者は實に幾千人の助力を得て漸く幸にも富を成したものである。決して自分の手一つで、自分の力のみで出来たものではない。實に家族、資本主、協力者、使用人、電話局員、電信局員、郵便電信配達夫、電話交換手、車掌、運轉手、驛長、船長、水夫、新聞雑誌者、記者、商人、政府當局者等數へ來れば直接間接に力を借りた人は到底數へきれない程ではないか。

又、此等多數の恩人を教育した學校、教育所、教育者に對するの恩をも計算の中に加へねばならぬ。

一 將軍名成つて萬骨枯るの例で、一成金富を成して萬人を貧うすといつたやうな具合である。彼を助けた千萬人の人は彼のたのみに多少の助力を寄與したものである。故に成金は自分の力のみで成つたといふことが出来ない。成金は自分の力+社會多數の人々の力+國家、社會の力、といふことをよくよく考へてほしいものである。

然らば一成金が百萬の富をなしたとしても自分の力は却て十萬乃至三十萬と見積らるべく他の七十萬乃至九十萬は國家社會に負ふところであり、社會多數の人々のお蔭によると觀念して之を教育事業であるとか、慈善、救濟の事業に投ずる義務があるであらうと思ふのである。

若し成金者にして此の主張に無理があると思ふならば試みに汝が富を成すに一人の助力者なかりしと假定して考へて見るがよろしい。汝若し絶海の孤島に於てそれこそ汝一人の手、汝一人の力にて如何して或金となり得たであらうか。或は山奥の奥の森林の中に一人棲んで居て他人の手を借らずしてよく成金となり得たであらうか。或は

汝は辨するであらう、我が人を使ふや勞銀を支拂ひ、金を借れば利子は拂つて來た。飲食、乗車、凡て相當の料金といふものを支拂つて來たのであるからそれで帳消ではないかといふかも知れない。それは有形の支拂であつて無形の支拂に於ては依然として汝は社會の隅々までに無形の借金を残して居るのである。此の借金は道德上無形の借金であつて敢て催告、取立、請求、差押、競賣、訴訟、強制執行等のことは受けないであらう。併しそれが無いのをよいことにして此の大きな道德的の借金を踏倒さうとするならば汝の生涯に於て必ずや一大決算期に會ふて成敗さるゝことを覺悟せねばならぬ。成金者はその所得の過半以上を慈善、救濟、教育事業に寄附するといふ新しい成金道德を涵養したいものである。これも亦教育改造の道程に横はる一つの輕からざる問題であらう。

五、國民性の改造と教育

論議を教育に上下するものは國民性の如何について深く注意せねばならぬ。即ち國民性の長所、短所を十分に研究してかゝらねばならぬ。第一に我國民性の長所は何れにありや。又、短所は何れにありやといふことを考へなくてはならぬ。これについては我國人もいろ／＼自省して論議する人もある。又、外國人の日本人觀などを見ると随分他山の石として参考反省に價する名論もある。

外國人が日本の國民の美點として忘れずには數へるのは犠牲的精神の強いこと。忠義の念、愛國の精神、禮儀正しいこと、清潔を尙ぶこと、尙武的なこと、儉約なこと、美術に巧なること等である。此等の美點は我國民性の長所として將來の教育にも大いに力を用ゐねばならぬところであらう。

之に反して外國人が日本人の短所として擧ぐるところを聞くに日本人は正直でないといふ。約束の期日が守れない、見本と同一の商品が届けられない、外國人と見れば高く貪る、誠に信用ならぬ國民であるといふものもある。又、日本人は談判しても叱

つてもニヤリ／＼と薄氣味の悪い微笑をもらすこれが又なか／＼油断ならぬ、屹度陰で舌を出す術策を弄する。感情氣分を顔色に現はさぬ。フランクリーといふ點が少しもない。又、日本人は一般に保守的で同化し難い國民である等の非難もある。此等の非難は一概に當らずとして斥くるわけには行かぬ。確かに我國民性の缺點の一面を指摘したものであるとして今後の教育についても大いに顧みなくてはなるまい。

我國民性の著しい現はれの一つは感情的なことではあるまいか。熱すること甚だ速かにして急なり、而もその熱し方たるや甚だ過激で、盲目的に行動し、前後の思慮分別なく判断を誤ることも亦多く、冷靜に判断する態度に缺如して居る。若し冷靜に判断せんとせば其の人は冷血漢なり、冷淡なりとの非難を受ける程である。而も熱するに速かなるだけ冷むるも亦甚だ早く、人の噂も七十五日とか、一ヶ月後に於ては到底同一事件に同一程度の熱と同情とを持ち得ないといふのが常態である。此の感情的なのは時には善いこともあるが、時には甚だ不利益不都合を招くことが多いことを忘れ

てはならぬ。今後の教育についても感情教育方面の研究工夫に一段の改造を要求したいものである。

次に我國民性の缺點の一としては摸倣に巧にして獨創に乏しい。よい加減に止めて置いて、徹底的なることが少ないといふ點である。即ち矢張り倦き易いのであらう。性急で仕上げを急ぐから早く成功しやうとあせる風がある。それで今少し待つてちつと研究した上で發表すればよいものが出来るのにそれを待つことが出来ない。つまりよい加減にしておツつけるといふことになる。まがいもので間に合せるといふこともなる。一寸眼に見えぬ人の氣がつかないところをごま化すといふことにもなるのである。今後の教育には大いに堅忍持久の精神と徹底的眞摯の精神とを植付けたいものである。

日本人は摸倣に巧妙であるから歐米人はよく我國民をモンキーレース、猿の民族といつて冷笑するのであるが、よいことの摸倣は決して悪いことではない。寧ろ獎勵す

べきものであらう。創造といつても無から有は出て來ないのであるから創造も摸倣に改造を加へたものであるといつてよいのである。創造も摸倣といふ作用なしには考へられないことである。よく摸倣してよく改造することが創造である。創造は摸倣を一步進めたものである。日本人の摸倣に巧妙なるところを利用して今一步進めて創造に導くやうにしたいものである。それには性急な國民性と不徹底な眞面目でない態度とを捨てさせてかゝらねばならぬ。

次に我國民性の短所としては公德心に乏しく自治的精神に乏しいことである。これも將來の訓練されたる國民としてはどうしてもつと自治的に教育して公德心をも併せ涵養したいものである。

要するに我國民性の長短を十分精細に研究して今後の國民教育の大方針を樹立する上に大いに参考としたいものである。此の國民性の改造といふことが矢張り教育改造上國民道德の根柢をなすものである。

六、教育監督者の改造

教育監督當局者の頭腦を改造することを忘れてはなるまい。即ち第一には文部省の改造である。文部大臣とか次官、局長、參事官、書記官、督學官を首め大小公吏の改造が根本である。此等の教育官吏中には往々にして形式にのみ拘泥して舊弊な時代遅れなことはかりいつたりしたりする人があるから今後の進歩的、研究的なるべき教育界を指導監督するといふことは出来ないことであらう。

次には國民教育監督當局者の頭腦を改造することである。此に國民教育監督當局者といふのは國民教育に直接關係ある文部省、地方官廳に於ける官公吏を指すのである。即ち文部省では普通學務局長以下その局に關係ある大小の官公吏、府縣視學、學務課長、郡市視學である。此等の監督者中には頑迷で、保守的で、時代遅れであつて到底改造された新教育界を指導するといふやうなことには資格せぬ徒輩が甚だ多いのである。

である。これは寧ろ大いに淘汰するとか、或は頭の改造的教育を施すことも必要であらう。併し、到底文部省が從來なし來つたやうな二三週間の講習會位では頭の改造は出来るものではないのである。

七、父母の頭の改造

教育の改造には兒童の父母即ち保護者の頭腦を改造することも亦甚だ必要である。もつと學校と家庭とが協力一致して互に接近し理解し合はなくてはならぬ。

兒童が學校で毎朝齒を磨くといふ衛生事項を習つて來て翌朝早速應用しやうとすれば子供の癖に生意氣をするなどといつて子供が折角習つて來た衛生思想を却が馬鹿にするといふのもある。

一女兒が私は大きくなつたら先生になりたい、と、いつたのに對して『こんな大切にして育て、やつてゐるのに學校の先生なんかになられてたまるものかね。』と、た

しなめた母親もあつた。

醫學博士の長男の小學生が四年生と語り合つてゐる話の一節に『僕の父さんは偉いや、病院へ行くまでに一人の患者を診察すれば三十圓でも五十圓でも朝飯前に取るんだよ、學校の先生なんか、僕のお父さんが一朝で取るのを一月かゝるんだとさ。』と、一言の下に教師をけなし去つたのもある。

子供は大人が智慧づけねば先生は偉い人と思つてゐるのが自然である。或る法學博士の娘が家庭でいろ／＼話をしてゐた時女中が先生と、お父さまとはどちらがお偉いでせうと尋ねた、すると、小學校の四年の件の少女は『そんなことはいはなくともわかつてゐるぢやありませんか』といふ。『それではどちらですの。』と、女中が重ねて尋ねると、『そら較べものにはならないわ。學校の先生の方がすつと偉いわ。』といったのもある。

學校の先生の批評をしたり、物質とか、収入、服裝、風采などによつて人物を評價することを教ふることは教育上誠に好ましからぬことである。然るに家庭の人々は大概これを平氣でやつてゐるのである。

家庭が今一層教育尊重に意を用ゐるやうにして呉れなくては教育の改造は出來ないであらう。

親のいふことよりも先生のいふことをよくきく、親のいふことはきかないが、先生のいふことはよくきくと言つて喜ぶ先生がある。併し、私は之を間違つた考へであると思ふ。親のいふことを第一に守らずやうに導くのが教育ではないか。此處にも父母と教師、家庭と學校との距離のあることを示してゐる。今迄のやうに學校と家庭とが殆ど没交渉では教育の効果は擧るものではない。今後はもつと／＼父母と教師とが接近し、理解し得るやうに相互に努力せねばなるまい。

八、子の心親知らず

八、子の心親知らず

『親の心子知らず。』とは昔から言ひ古された言葉である。これは親の氣心をも汲まないで子供が勝手に行動する謂である。親の心事を理會することをなし得ない子供を持つた親は不幸であらう。親の苦勞を察せずして心配をかける子供は誠に多いのである。

併し、これは親の立場のみから考へたことではあるまいか。子供をして親の思ふ通りの思想を持たしめ、親の望む通りの行動をすることを親が望むといふのはチト無理ではあるまいか。親は子供を自分の思ふ存分に絶對的自由に取扱ふことは出来ない。此に親と子との立脚地が異つてゐるといふことを考へて置かねばならぬ。

子供の立場からいへば子の心を知つて呉れない親も亦随分多いのである。子供の氣心も汲まないで舊弊なこと一點張りて子供に望む親もあらう。又、子供の心事をも察せずして的外れの而も時代遅れの要求ばかりをする親もあるであらう。

子供の心理を解せずしてどうして本統の活きた教育が出来やう。父母教師は常に子

供の心理状態に對して深甚の注意を拂ひたいものである。

子供の心理は恰も文明といふ大河の支流である兒童川といふのを流れ流れて居るやうなものである。此の文明の兒童川の流れを詳細に研究しなくては子供の心理は解るものではない。親が自分等の過去に於ける子供時代のことのみを想像して子供を律せんとするのは既に大きな時代錯誤である。今日の子供は半世紀前の昔の子供ではない。新文明の社會的空氣の裡に育つた子供である。知識も思想も感情氣分も、遊び方も、學習の仕方も、思考の法も、言語の表出方法も、行爲の様式も大いに其の趣を異にして居ることを見逃してはならぬ。

又、子供の心は時々刻々に變化又は進歩して行きつゝあるものである。即ち絶えず文明的兒童川を流れ流れて居るものである。今日の子供は昨日のそれとは同一ではないのである。それで家庭の影響、學校、教師、學友、交友、社會一般の環境によつて大なり小なりの影響とか感化を受けつゝ、間斷なく時々刻々に變化しつゝ、進んで居るも

のである。

試みに子供が二三人集まつて遊んでゐる状況を子供に隠れて私かに注意して見るがよろしい。子供のいふところ、子供のするところの凡てが環境の感化より來つたものであることに驚かざるを得まい。又、子供は父母、教師の言動そのまゝそつくり繰返して居るのに一種のショックを感ぜざるを得まい。又、子供の言動が親の時代よりも著しくませて小賢く打算的になつて來てゐるのに氣づくことであらう。

子供は此の心理の流れを十五年も二十年も間斷なく流れ流れて遂に一個の人格者となるのである。此の心理の流れに同情し注意して適當に子供を指導することが父母教師の責任である。此の子供の心理を没却した態度は正しく子の心親知らずの無慈悲なる而も愚なる仕打であるといはねばならぬ。子供の心理を理會することは父母教師の教育改造のために努力せねばならぬところであらう。

子供の言動を細密に注意してゐると子女教育上殊に有益なる暗示とか教訓を得るこ

とが甚だ多いのである。七歳の少女がおまゝごとの遊びに於て『あなたはお父さんにおなりなさい。お父さんは夕方歸つて來て無理をいふのよ、それからお母さまと喧嘩をして、それがすんでから夕御飯よ。』と、いつたのがある。私はぞつとしてその少女のいふところに驚かされた。私は少女の家庭を想像して淋しい暗い家庭を偲んでゐたが、數日の後に於て赤ん坊と共に母親の自殺といふ一大凶變が新聞紙によつて報せられたのである。

『あなたシュウニンよ。私がカンシになりませう。さあ、あなたあばれるのよ。』と、いつた。その子は父が看守である、囚人のその日々の行動が家庭に於ける食卓上談話されるのでそれを聞いて早速遊戯に應用したのである。子供は一度見聞したことは深く印象されて早晚遊戯、舉動にそのまゝ再演應用するものである。誠に子供は恐ろしいものである。

七八歳の子供でも物價騰貴といふ流行語を口にするのもある。九歳の尋常二年生が

米一升八十五錢とか三等米が七十八錢、外米なら五十六錢など答へたものもあつた。私の長男は五歳のときに原稿用紙に書いたのを指して『これ原稿?』と、いつたことがある。子供の前ではうつかりしたことはない。子供は恐るべきもの、油斷がならぬものである。恐るべき受感性に富んだところに頼母しいところもある。子供はよくもなり、悪くもなり易い感應性が旺盛であるといふものである。父母教師はもつと子供の生活、子供の思想や子供の言動に注意し、研究し、警戒したいものである。

九、子供の三大権利を認めよ

教育を改造するについては子供の立場といふものを明確に考へて置かねばならぬ。子供は親が産んだのであるから其の子供を養育するのは其の親の當然なる義務である。子供からいへば産み出された以上には教養して一人前のものにして貰ふ権利を持つて居るのである。

誰のお蔭でこれまで大きくなつたと思ふかとか、シンババのお世話は誰にしてもらつたのだなど、我子を養育したとて大さう恩にさせる親もある。斯くも恩にさせられると子供としては寧ろ少しく不快な感を起さざるを得まい。産んでやつた、産んでやつたと親は申されるけれども何も自分の方から頼んで拵へて貰つたといふ譯でもなし、親達が勝手に作つて置きながら誰のお蔭もないものではないかと一本返したくもなるであらう。

子供を育てるといふことが既に親の義務である以上、親としては其の子に對してそれを大さう恩にさせるといふことは道理のないことである。

又、子供を資本の主體と考へて、老後徒らに我子に頼りかゝらうとすることも間違つた考へであるといはねばならぬ。更に親が子に對して報恩的孝行を迫るとか孝行を催促するといふが如きも矢張り親の利己的要求に過ぎない。子供が親に孝行するといふことは全く子としての美德である。親から孝行を迫るといふのは甚だ面白くないこ

とである。

子供に獨立心の必要なことはいふまでもないが、親にも亦甚だ必要なことである。獨立心なく、實力のない親は老後の行末を心配して、無暗と子供に依頼したがる、そのために著しく子供の活動を奪ふものである。斯く我子の活動力を減殺して平然たる五十の若隱居の如きは獨立心なき親としてのよい標本である。斯くの如き親は子より見れば誠に厄介な親であり、國民としては頗る不生産的な人間であるといはねばならぬ。

親の子に對する義務責任は斯くの如く重いものである。此の重い責任は赤ん坊が三十歳近くになるまで持續することを忘れてはならぬ。

産んだ以上はその子を養育し、教育し、獨立した人間にしてやるのが親の義務であると感じ、又、此の輕からざる義務を自覺すれば成算なくして妄りに子供を産むといふのも一種の罪惡となることもあらう。最大多數の善良兒童を産むに越したことはない。

い。けれども多數の惡童を作るよりも少數の善童を作る方が社會に貢獻するところが多いであらう。

親に成算なくして濫造されたる子供は不幸である。彼等は法が保護せる義務教育すら終らずして勞働させられ、或は不良少年の群に投じ、或は賣春婦となり、何れも社會に害毒を流すのみで徒らに監獄、警察、貧民窟、感化院、養育院、孤兒院を繁昌せしむるのみである。何事にも粗製濫造は慎むべきことであるが、此子供の粗製濫造程恐ろしいことはないのである。

成算はあつたにしても天災不慮の災害によつて一大不幸に遇ふことも亦豫想せねばならぬ。そのためには保險を利用するの外はない。

貧乏子澤山で到底十分教育することが出来ない場合には親にも、既に生れた子にも、將來生れんとする子にも不幸であるから此に避妊法の適用を餘儀なくさるゝであらう。西洋の方では既に受胎した人間の形態をなせるものゝ生を奪ふ所謂墮胎は殺人

の罪惡であるけれども、未だ受胎せざる以前に於て精液を流してしまつて人間の形態になることを避けるといふことは殺人ではない。従つて罪惡ではないと主張するものもある。

私は子福者を保護するために三人以上子供を持つことを國民の義務となし、その義務を果たさざるものには子無税、獨身税を課し、以て貧乏なる子福者を補助したいと主張するものである。

歴史の教ふところは權力の消長、權利主張の爭奪である。人民が今日の權利を得るためには幾千の戦争をなし、幾億萬の血を流して初めて得たものである。權力は實に腕力に訴へてのみ漸く得て來たものである。子供の權利が何故に認められなかつたかといへば子供には能力なく、金力なく、團結力なく、腕力もなかつたからである。

『子供は家庭に於て親の權力内にあつていかに虐待さるゝとも之を訴へんにも子供の爲めの法廷はなし、異議を申立てんにも知力乏しく、證人を呼ぶべき特權もなく親

は自ら裁判官にして同時に行政官である。』と、はギルマン女史が子供のために訴へた名言である。

子供は親の所有物ではない。封建時代の如く親は子供を生殺する權利を有たぬ。親は終始子供の善良なる保護者であらねばならぬ。然るに何故ぞ子供は親のために奴隷の如く使はれ大人よりも却て酷しき壓迫を受け、大人が感情に走つて子供を叱るときには手荒き體罰を加へられ、時には動物よりも手荒く酷使されることもあるのである。

動物虐待防止よりも六千萬日東國民の過半数である四千萬人の子供虐待防止を叫ぶ方が遙かに急ではなからうか。

實に子供は大未來を有する小國民である。此の大切なる小國民の權利は親と雖も帝王と雖も之を冒してはならない筈のものである。子供の權利を認めて子供を愛護するのは即ち漸次全人類を救済する所以である。子供を粗末にする國家は衰微し、子供を大切にし、子供の權利を尊重する國家は必ず榮ゆるのである。

子供の権利は出産と同時に生ずるものではない。實は受胎と同時に生ずべきものである。何となれば受胎すれば善良なる保護の下に分娩せしむることを法は強要してゐるから墮胎は既に子供の生を奪ふ最大權利を消滅せしめたものとして罪を重く問ふのである。これを見ても胎兒は既に生存の權利を有し、法によつて保證されて居ることがわかるであらう。又、昔から教育上胎教が唱へられて妊婦の節制が唱導されたのも胎兒の權利を主張したものに外ならぬといつてよいのである。

生存努力の益々必要なる將來の社會に處すべき小國民の資格の第一は實に健全なる身體である。私の經營してゐる帝國小學校に於て毎年赤ん坊展覽會を催し、二千人あまりの母と赤ん坊とを研究した結果によると『丈夫な赤ん坊は丈夫な母に宿る』といふ一語であつた。此がために女子教育に於ては大いに體育を奨励したい。花嫁を選ぶにも體格を第一にしたいものである。妊婦には子供の權利のために衛生を守らせた。生理的の節制を望みたい。母體を健全にして置いて丈夫な赤ん坊を持つ資格を作

つて置くといふことは未だ産れない子供の持つべき權利であらう。

子供には三つの天與の權利がある。第一には善良に産んで貰ふ權利、第二には善良に養育して貰ふ權利、第三には善良に教育して貰ふ權利である。(拙著「子供の權利」東京牛込南光社發行定價一圓五十錢參照)

一〇、小兒労働を嚴禁せよ

ワシントン市に開催された國際労働會議に於ても小兒の年齢、労働時間、労働の種類等が議題に上つたやうである。思ふに我國の工場法案は未だ小兒労働を保護するに十分ではない。又義務教育に關する法令はあつても學齡兒童中の不就學なる小兒労働者を十分取締ることが出来ないやうである。十歳位の少女が工場へ通つてゐる。子守として雇はれてゐる。十二歳未満の少年が小僧として店頭に働いてゐる。其れ等の大多数は義務教育未了の少年少女ではないか。

此等小兒労働者の實數は幾何であるかは、當局者の調査統計に見るべきものがないから判然しないけれども、なか／＼の多數に上ることであらう。生存努力の惡戦が度を加ふるに従つて此の小兒労働者は増加するばかりであらう。

物質的文明の流れを汲む國家は實業的奮闘上、此に猛烈なる生活戦を生じ、小兒労働問題もやかましくなつて來るであらう。我國は家族制度を以て本位とし、孝悌、扶養の美德は親子兄弟の間に生じて發達したから、少年少女の愛兒をして過勞に葬らんとするが如き鬼父母のあるかを聞かなかつた。假令多少は之ありたりとしても、之を評するものは孝子の美名を以て賞し、之を賞して之を憐ます、家族間に權義思想の乏しい我國では孝行の美名の下に、子としての權利は沒却せられ、親の前には子の權利は認められず、社會は常に此の間に對して判斷を下すに正鵠を失して來たのである。

米國に於て年齢十六歳以下の小兒労働者の總數は労働局の統計に依れば實に百七十五萬人である。

工場及商店の小兒労働者數	六五〇、〇〇〇
農事及製作の小兒労働者數	一、一〇〇、〇〇〇
合計	一、七五〇、〇〇〇

之を通學してゐる千五百萬の學童に比較すれば十パーセント以上の小兒労働者を有する譯である。即ち米國の小學生十人中一人以上は小兒労働者である譯である、此の小兒労働者といふのは年齢十六歳未満の子女で、中には四五歳頃から早くも小さい労働に従事して居るものもある。併し一般には十歳から十五歳までの子女が多いのである。

彼等の受くる報酬は、職業、年齢及技術熟練の程度によつて差別があるけれども容易にして特殊の技術を要せざる短時間の労働は一日三十仙内外である、更に稍、困難にして労働時間も亦比較的長いものは一日一弗五十仙内外を受くるのである。困難なる労働としては石炭を採掘せるもの、又は土木、新聞賣子等の夜業である。

職業の種類は商業としては小僧、商品配達夫、製造工業に従ふものは工の職工、その他の荒仕事には土木、農業、鑛業、運搬等がある。夜業には土木、鑛業、職工、新聞及電報配達等である。

ハッチンソン博士曰『野蠻國では小兒は生くるために自己のために働き、未開の地にありては両親のために働き、文明社會にありては實業のために斃れんとして居る。又年齢の上から見てもさうである。少年は自己のために働き、壯年に及んでは實業のために働き斃るゝのである。文明の度と年齢とによつて雇主を代ふるのである。』

幸か不幸か、文明の世に生れた小兒は實業のために働くばかりでなく、自分のためにも働かなくてはならぬ。小兒に對する荷は重きに過ぎるではないか。一方には父母を扶養する義務は重く、又一方には貧苦が肉薄して來る。味なき食物に身を害し、光線の弱きところで色を失ひつゝ過勞に疲れ、勞働時間の長きに泣きつゝある幾多の小兒の胸中は果してどうであらう。

昔はよく匹夫も大統領の椅子を占むべしてふ個人平等主義の米國青年が嘗ては謳ぐた詩韻も今の苦境に沈む彼等の小さき胸にはそれさへ口ずさむ勇氣がない。野心、功名、努力、名譽の觀念に乏しい少年の、あはれさは想像以上である。

十二三歳の少年は鋭眼、血色勝れ、顔には賢明の色を呈してゐるのが普通である。然るに小兒勞働者となるや、十四歳にして眼色稍々衰へ顔色には重味を呈して來る。十六歳にして知力の發達は停止し、同時に意志の力が衰退し、將來を希望し得なくなる。身體は疲勞する、血色は悪くなる、體量は漸減する、その行末は誠に心細いものである。

小兒勞働者が猛烈なる機械に觸れて片腕、片手、又は指足を失ふことは珍らしくない。併し此れ等は外觀上の損失に過ぎない、未だ以て將來の活躍を悲觀すべきではない。然し身體衰弱、氣力喪失、視力、聽力を失ひ或は思考力、記憶力、意志の力を少年時代の過勞によつて減退せしめたといふに至つては、最早將來のことも決せりとい

はなければならぬ。小兒労働の恐るべきは精力の減退である。勇氣、活力は少年發展の一大要素である。小兒労働に従ふものは重き責任の惡税に惱み、此に勇氣といふ一大資本を失ふのである。此の勇氣を失つた少年の將來は誠にみぢめなもので、足許の危い活動、發展は到底望まれまい。

『今日の子供は明日の市民である。將來の健全なる市民を得んには、健全なる子女を保護しなくてはならぬ。如何なる國家でも將來の觀念なくして過去に於てのみ存在することは出来ぬ』とは、ハーン教授の説くところである。

國家の眼から見れば教育は將來の國民を鍛へる資本である。國家が進んで莫大なる資本を投ずるのは將來の國民の大活動を豫想して、現在には少かちざる消費を犠牲に供するのである。教育を中途にて廢し、直ちに殖産の業に従ふ小兒労働者は國家から見れば資本を有せざる無定見の投機輩又は未成品のやり繰りに過ぎない。現在をのみ目的とする國家ならば未成品の濫造は一時的の利益であらう。併し少し手を加ふれば立

派な一人前の既成品となる良材を、あたらず人前の二足三文の未成品として徒費するは將來を知るもの、決して成さざるところである。

百の未成品よりも寧ろ一の完成品の方が貴い。未成品の濫造は即ち既成品の良材を限定するものである。小兒労働を許し、未成品を濫發せしめて未だ悟らざるものは現在の國家のみを思慮して毫も將來を念としない近眼者流の辿るべき國家自滅の軌道である。之を國家經濟の上より見ても小兒労働は實に國家の經濟を危からしむるものである。大事業のなるには常に大準備をしなければならぬ。少年時代には發達の途にある準備の時代である。發育の時期である。然るに彼に向つて發育を犠牲にする過勞、彼等將來の準備をするに害するやうな業務、彼等の教育を妨害するやうな勞働を課したならばその結果はどうであらう。

教育を終つて完成品としての丁年が百の生産力、勞働力を有するものと假定するならば未成品としての小兒労働者の生産力は三十乃至六十に相當するであらう。前者が

既知の學理を資本として愈々經濟を積むに従つて其の生産力も漸加し、二百乃至三百に達するものあるに對して、後者は徒らに未知の經驗を繰返すばかりで其の生産力は九十乃至百に達して行末は増加するの見込がない。即ち教育の程度と工場、商店に於ける俸給額を按分すれば次の如き比例となる、之を推論し、這般の消息を更に具體的に示すことが出來やう。

教育ある丁年労働者(完成品)

教育なき小兒労働者(未完成品)

教育的資本

一〇〇

三〇

丁年時代の生産力

一〇〇

五〇

壯年時代の生産力

三〇〇

一〇〇

將來に向つて發展せんとする國家及個人は現在の小利を犠牲にして將來の大利を捨つるが如き愚を學ばないやうにしたいものである。

小兒労働の如きは之を國家より見るも、之を雇主より見るも、亦之を小兒自身より

見るも決して望まじきことではないことが明かであらう。而も眼前の貧苦に迫られて可憐なる少年を過勞せしむるは抑々生死の止むなきに出でたのも多いであらうけれども、今に於て其の救済の策を講じなくては時に遅れて如何ともすることが出來ないやうになるかも知れないのである。

小兒労働に就ては家庭、小兒及労働所の二方面から精密に観察し調査しなければならぬ。

一、家庭の觀察 米國では就學督促の任に當るものが學童の缺席を知らば直ちに其の家庭を訪問して子女缺席の理由を質すのである。家庭の状態、家庭生活の實狀、家政の現狀、養育者、收支の經濟事情等について十分觀察し、果して小兒労働が一家族死活の問題から來たものかどうかを公平に明かにするのである。

二、小兒の觀察 學校は義務教育完成の點より、國家は小兒保護を目的とした小兒労働制限令に基き、小兒労働者の姓名、年齢、住所、就職年月、就業時間數、給金

高、職業の種類、父母及家族の經濟關係、教育程度について調査するのである。

三、労働所の觀察 小兒が労働に従事する場所即ち商店工場其他百般の職業地に就て嚴密に調査するのである。

四、調査事項 調査の年月日、雇人数、當日の雇人出勤者數、女雇人数、年齢及性別小兒労働者數、小兒労働時間數、小兒労働の種類及性質、小兒夜業の時間（何時より何時まで）、小兒労働者の疾病、小兒労働者の過失、負傷の度數。

米國では小兒労働検査官數十名を置いてその取締に全力を注いでゐるのである。紐育州では六十二人の検査官中十名の女子検査官がある。

小兒労働を防止するには以上に述べた觀察の外に法令を設けて、特殊の事項を限定することが必要である。例へば年齢を限定し、或は労働時間及労働の種類を限定するの類である。

一、年齢の制限 理想としては成るべく丁年に近い頃まで小兒の労働を絶対に禁止

したいものである、けれども貧富の程度、又は労働社會の人物經濟上之れを許さない場合が多い。併し小兒が義務教育を完了する頃までは小兒の労働を嚴禁したいものである。米國では十四歳未満の小兒の労働を許可しない規定である。然るに此の法文は止むを得ざるに出でたる最底限度を示したるものであるから、我國に於ける十二歳まで即ち六ヶ年の義務教育の完了後直ちに労働せしむるのは早きに過ぐるものである。どうしても早く義務教育を八ヶ年に延長して十四歳を以て小兒労働の最低年限にしたものである。

二、労働時間の限定 労働時間の長短は職業の種類とか難易及年齢によつて之を適當に限定しなくてはならぬ。大人の労働が八時間とすれば小兒の労働は五六時に限定されなくてはなるまい。

三、職業範圍の限定 如何なる範圍まで小兒の労働は許可すべきかは之亦重大なる問題である。年齢に應じて斟酌すべきは勿論であるがアメリカでは鑛山、運搬、土木

労働を以て小児には過度にして困難且つ有害なりとして極力反對してゐるのである。道辻の商賣(Street trade)としての辻賣、縁日商、新聞賣子、靴磨を禁止すべしと説くものが多い『若し必要とあらば少時新聞紙の來るのを咎めず、可憐なる少年によつて一時間早く新聞を讀むよりも吾々は丁年者の配達し來るのを待つ位な辛抱は甘じてしたい』とはウエングアスキーの叫ぶところである。

四、夜業の限定 思ふに夜業は職業中最も困難にして不自然、且つ不衛生的な業務の一つである。電報配達、新聞賣子、夜番、工場の夜業等いろいろあるが、要するに夜業は發達の道にある少年には有害であるとは醫學者の説くところである。又小兒労働調査の結果に見て其の害の大なることが知れるのである。假令之を許さなければならぬ場合に於ても八時又は九時以後の夜業は絶対に禁じたいものである。尙ほ此の外小兒労働問題を解決するには義務、制裁及補助、教育によらねばならぬ。

父母が子を産めば愛兒教養の義務が生ずるのである。此の義務を遂行しないものは

老後決して扶養のことを子に迫る道德的權利はないのである。併し世には病氣、事變の失敗、家政の不如意、平素の貯蓄なくして愛兒の義務教育さへ完了せしむることが出来ないで彼を過勞に斃さんとするものがある。社會の制度が悪いにしても其の直接の責任は依然として父母の双肩にかゝらねばならぬ。子に對する父母の義務を刻みつけることは文明社會に於ける必要事の一つであらねばならぬ。

身邊の苦境如何ともなし得ないものに對しては一步を恕すべしであるが、父母の慢から來たものは宜しく適當な制裁を加ふるがよろしい。徒らに子女教養の義務を怠る様な父母は罰則を設けて罪すべきである。又同時に不法の雇人をした雇主に對しては之又同様に罰するがよろしい。

義務の念に強くとも父母の努力は到底義務を履行し得ないとしたならばどうしたらよからうか。父母は責任を感じ義務を忘らぬが、その責任を完了するの術を知らないものに對しては、處するにも言葉を和げなくてはならぬ。接して同情がなくてはなら